注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
トリコの力を持って戦国乙女の世界に転生したぜ!?

【作者名】
Ｚ／Ｘプレイヤー２６

【あらすじ】
とある世界は消滅してしまった…そして女神が消えた世界の全ての人間を転生させた!!そしてその転生作業の最後の一人の『遊佐　悠哉（ゆさ　ゆうや）』はトリコの能力を持って転生した!!その転生先は戦国乙女の世界!!歴史の知識は宛にならない戦国時代を悠哉はどうやって生きていくのか…そして女神が悠哉に与えた、残念な指令とは!?

プロローグ　最後の転生者

白い空間に、一人の女神が居た…その女神はため息を吐いていた、とある事件によって消えてしまった世界の全ての人間を転生させ終えるところだからだ…

『これで最後の一人ね…ようやく終わるわ…1年以上かかっちゃったけど…さて!!最後の一人!!いらっしゃい!!』

そう女神が言うと、光に包まれた男が現れた…男は不思議そうに辺りを見回している…

『ここは…何処だ?』

女神が男に話しかける

『貴方は…死んでしまったの…だから、転生させるわ…』

男は女神の話を聞いても表情を変えなかった

『死んだ…ね、んで?俺は転生すんのか?何処にだ?』

『あら…驚かないの?大抵は驚いて時間が掛かるんだけど…』

男は至って平然と話す

『別に驚かねぇよ…死ぬ時には死ぬだろ?自然災害とかなら受け入れるしか無いしな…』

その話を聞いて、女神は驚いた…考え方が、自分の息子にそっくり

だったからだ…

『驚いたわね…貴方…私の子供に似てるわ…』

『あんたの子供？てか、女神っぽいけど、既婚者なんだな』

胸を張る女神

『当たり前よ!!私は元の世界ではモテたんだから!!』

あ、そう、と興味無さげに返す男に若干女神が腹を立てたのは別の話である…

『で？俺は何処に転生するんだよ？』

『貴方が決めて良いわよ？最後の一人だし、能力とか沢山付けてあげるわよ？』

最後の一人？何人も死んだのか…マジで隕石とかのデカイ自然災害か？しかし能力か…なら…

『トリコの能力をくれるか？』

『トリコ？あの漫画の？釘パンチとか？』

『そうだ…女神でも、漫画とか読むのか？』

またしても胸を張る女神

『これでも貴方と同じ世界の出身です!!』

『ふーん…じゃあ、トリコの能力で大丈夫だな？』

『勿論!!あ、でも、漫画はかなり進んでるわよ？良いの？』

は？何でだ…？

男の表情を見て話をする女神

『実はね…貴方が死んでから、1年以上経ってるの…』

『何故だ？』

申し訳なさそうにする女神

『貴方が…消えた世界の全ての人間を転生させる作業の…最後の一人だからよ…』

待てよ…世界が消えた…？冗談…じゃあねえな…いや、世界が消えたのに、漫画はかなり進んでる？どういう事だ？

『貴方…凄いわね、普通なら直ぐには理解できずにパニックになるのに冷静な思考が出来てる…』

『誉めて貰って光栄だが、世界が消えたなら、漫画は進まんだろ…』

『その答えは簡単…なのかしらね？』

俺が知るか

『心の中で返事しないでくれる!?』

『やっぱ心を読めるのか…』

笑う女神

『あら…鎌をかけたの？』

笑う男

『当然…で？答えは？』

『まあ、有り体に言えば、貴方のもと居た世界に近しい平行世界のトリコの漫画って事よ…大抵の転生者は、その近しい平行世界に転生したわよ…皆がそれを望んだからね？』

少し考える素振りを男がする

『まさか…全世界の人間を…あんたが一人で転生させたのか⁉』

『殆どはね？私の子供の次男の方は、他の奴に頼んだけどね？あ、貴方が似てるのも、次男の方かしら‼』

要らん情報を貰った気がするが…まあ良い…それよりもだ…全世界の人間を転生させた…で、その最後が俺なら…

『決めた…俺の転生先は…』

『転生先は…？』

ニヤリと男が笑い…

『あんたが決めろ‼俺の第二の人生…あんたに選んでもらう‼能力は

トリコのままでな!!そこは譲らねえ!!後、トリコの能力は、その平行世界のトリコとやらに準じて貰う!!』

その発言を聞いて、女神は大笑いした

『あはははは!!本当にあの子にそっくり!!むしろ、あの子の親友と、あの子を足したような子ね貴方は!!』

『さて…どうするんだ?俺の申し出を受けてくれるのかよ?』

心底楽しそうに女神は笑った…

『喜んで受け入れるわ!!あ、後、まだ平行世界のトリコは連載してるから、話が進むにつれて、貴方の能力も、強化されていくから…その分修行も大変だけど…頑張ってね!!』

それを聞いて、男も楽しそうに笑った…

『それなら…面白い世界にしてくれよ?トリコは今、どの辺りなんだ?食林寺には着いたのか?確か最新号で、食林寺を目指すとか言ってたしな…』

女神は考える素振りをする

『あ~…とりあえず、転生してみれば分かるわよ…』

何で乗り気じゃないんだ?ま、転生してみれば分かるか…そうだな…とりあえず転生したら確かめるか…

『そうだわ!!転生するにあたって、私からも条件を付けて良いかしら?』

こいつの出す条件…面白そうだ…

『ハーレムを作りなさい!!』

は?今…なんて言った?

『ハーレムを作りなさい!!大事な事だから二回言ったわよ!!』

『ハーレムを作れだぁ!?俺はそう言うの苦手なんだよ!!』

女神はニヤリと笑う…

『私の子供にも同じ指令を出したわ!!あの子もそう言うの苦手だけどね!!』

『最低な親じゃねえか!!息子に不純異性交遊を勧める親なんて聞いたことねえぞ!?』

更に女神はニヤリと笑う

『あの子も苦手だけどね…着実に指令を完遂しているわよ!!現時点で、四人は彼女が居るわ!!』

俺は何故こいつに人生を預けたのか分からなくなってきた…

『さてと…転生先が決まったわよ!!』

『何処だよ…?』

『教えない~♪ニヤニヤ…』

『最早口に出してんぞ…』

マジで分からなくなってきた…

『じゃあ…行ってらっしゃい!!』

女神が男に手を振る

『あんたに言う事がひとつある…』

『何かしら?今さら変更はしないわよ…?』

ったく…最後の一人なら、言うしか無いだろ…

『…消えた人類を代表して言わせてもらう…『お疲れさん…転生させてくれて…ありがとう!!』…じゃあな…言いたい事は言わせて貰った…』

『貴方…名前は…?』

今更かよ…

『遊佐　　悠哉（ゆさ　　ゆうや）だ』

泣きながら笑う女神

『どういたしまして!!悠哉!!頑張ってね!!』

こうして消えた世界の人間は全員が転生した…そしてこの物語は、消えた世界の最後の転生者の物語…

一話～噂の将軍

さてと…女神が俺を転生させてから二日…未だに森の中をさまよっているんだが…あの女神…何で…

『何でトリコの嗅覚が付いてないんだよ!?トリコと言えば、使っている素材や、フェロモンをも嗅ぎ分ける嗅覚だろ…釘パンチは何故か５０連まで打てるしな…1年の間に何があった…』

ボヤきながらも悠哉は歩いていた…確かな確信を持って…

『しかし…便利だな…直感力は…何故かあんまり腹は減らねえし、トリコの能力だとしたら、実りある1年って次元じゃねえぞ…食林寺…一体どんな修行場所だったんだ?』

そんな事を考えている内に、悠哉は人里に着いていた…

『人が居そうな場所に着いたな…随分と古臭い所だな…さっきの森といい…相当な田舎だな…』

村人らしき人物が、悠哉を見つけて話しかける

『妙竹林な格好だな…あんた、なにもんだ?ここら辺の人間じゃねえな?』

田舎じゃねえぞ…これは…かなり昔の時代なのか!?

『いや、ちょっと旅をしててな…』

悠哉の話を聞いて、驚く村人

『あんた、こんな危ない時期に旅をしてんのか!?』

返答をミスったか？こんな危ない時期に？

『危ない？そんなに大変なのか？』

『おめえ…相当な田舎者だな…この辺り…つっても、山を２つほど越えねえといけねえが、京の都が近くにあるからな…比較的に安全だけどもよ…他は戦だらけで大変だろう？』

戦…京の都…まさか…戦国時代か!?

『なあ…あんたから見てだが…一番強い武将は…誰だと思う？』

村人は考え込んでいる…

『やっぱり強いなら、織田ノブナガか、武田シンゲンじゃねえか？』

織田に武田…確定だな…戦国時代か…面白そうだ…

『だけんども…やっぱり一番わしら人民達の事を考えている方は、将軍の足利ヨシテル様だな!!』

足利…余りイメージが無いが…確か将軍家だったか？余り覚えてないな…

『足利ヨシテル…強いのか？』

『おめえ!?ヨシテル様を知らねえのか!?おめえ本当になにもんだ!?』

ヤバイな…さっきから質問をミスりまくりだな…

『まあ、ええけどな…』

良いのか…

『いいか？良く聞けよ…？ヨシテル様はな…白き剣聖と呼ばれる程に剣の腕がずげえんだ!!』

『白き…剣聖…』

村人は頷いた…

『でも、噂じゃあな？』

『噂じゃあ…なんだよ？なんか良くない噂があるのか？』

村人は首を横に振った

『いんや…その逆だ…余りにもヨシテル様のお姿が美しいから…そんな通り名が付いたって噂があるんだ…』

※この噂は村人の勝手な噂です!!

なんだよ…今のテロップ…

『まあ、良いがな…山を２つほど越えれば京の都に着くんだな？』

『ああ…あそこに見える山を２つほど越えれば京の都に着くぞ…？』

笑う悠哉

『じゃあ…行ってみるかな…!!』

『おめえ…京の都に行くのか!!』

頷く悠哉

『そんなに面白そうな奴が居るなら…会ってみてえ!!』

『将軍様に会うのは…至難の業だぞ…それに今日は日も暮れてきた…行くとこねえんなら、わしの家に泊めてやる、明日にすればええ』

考える素振りをする悠哉

『なら…お言葉に甘えさせて貰おうか…何か手伝う事はあるか?』

『なら、薪割りを頼めるか?若い衆は皆、都に行っちまったからな…ここに居るのは年寄ばかりでな…』

笑顔で答える悠哉

『分かった…この村の1年分の薪を割ってやろう!!』

大笑いする村人

『気持ちはうれしいけどよ…あんまり無茶は言うもんではねえぞ?』

『さっさと始めるぞ…あんたの家は何処だ?』

村人が悠哉を案内する

『ここだ…薪割り頼んだぞ…出来るだけで…』

村人が言いかけた、その時…一瞬で積んであった大量の木が真っ二つに割れた…

『さてと…他の家も回ってくる…』

『おめえ…何した…？おめえ妖怪か？』

考える悠哉

『どうだろうな？強いて言えば…鬼か…』

少し怯えた様子の村人

『鬼？』

『俺も良く知らん…少し漫画に…いや、何でもない…』

さてと…とりあえず、薪割りをしますか…

物の１０分で、村の薪を全て割った悠哉

『すげえな…マジで食林寺の修行はヤバかったらしいな…』

『おい、おめえ…夕飯が出来たぞ…』

やっぱ若干、引き気味か…まあ、仕方無いな…

『ありがとうな…』

出されたお膳の前でしっかりと手を合わせる悠哉

『この世の全ての食材に、感謝を込めて…頂きます!!』

余りにも大袈裟な程に食材に敬意を表す悠哉に対して、村人は悠哉は悪人ではないと、確信を持った…そして夕飯を食べ終えて…

『ご馳走様でした!!』

『お粗末さまでした！おめえは…いいやつだ…明日からの旅は…頑張れよ…!!』

頷く悠哉

『ああ…俺も、この一宿一飯の恩は忘れねえよ!!

こうして目的が決まった悠哉は、明日に向けて眠りについた…

二話～料理人は独眼竜!?

悠哉は早朝に村を出た…悠哉を泊めてくれた村人は悠哉を理解してくれたが、他の村人は悠哉を気味悪がっていたからである…このままでは、あの村人に迷惑がかかってしまう…そんな考えで悠哉は誰にも気付かれない内に村を出た…

『にしても…山を越えるのは辛くは無いが…やはりトリコと言えば、料理人だよな…俺も料理が出来ない訳じゃ無いが…やはり食材も美味しく調理して欲しいよな…』

等と考えながら山道を進んでいくと…

殺気か…？いや、ただの視線だな…振り切るとしよう！

『山道でマイナスイオン吸収しながら走るのは良いかもな!!』

そんな独り言を言いながら、走り出す悠哉

視線は…付いてきているな…中々の速さだ…さて…ここで一気に振り返れば…

『さて…顔を見せて貰おうか…』

一気に振り返ると、双剣を持った、眼帯をした女性が居た…

『ッ!?いきなり振り返るとは…想定外だった!!』

『コソコソと…武器まで出して、何の用だ？』

拳を握る悠哉

『我は伊達マサムネ…剣の修行の旅をしている者だ…』

伊達マサムネ…確か、渾名は独眼竜…だったか…？にしても…

『…女？』

『確かに我は女だが…何か可笑しいか？』

可笑しいか…じゃなくてだな…独眼竜が女か…転生先だし…普通の戦国時代な訳無いか…

『いや、何でもねえよ…』

『そうか…ならば、手合わせ願えないか？』

マサムネが双剣を構える

『何でだよ…理由は？』

『貴殿がかなりの強者だからだ…』

成る程…修行の相手にするつもりか…

『断る、俺に…利益が無いからな…』

『我では相手にならない…と？』

めんどくせえタイプだな…

『俺は人には基本的に手を出さない…喰えないからな…喰わないなら命は奪わないし、極力戦わない…』

少し不思議そうにするマサムネ

『食事が大事なのか…?』

『食事は大事だろ…命を食べて、自分の命を長らえている…だから、命を奪う事に関しては…覚悟がいるんだよ…』

頷くマサムネ

『成る程…それが貴殿の矜持なのだな…』

『そういうこと…だから人には極力手を出さない…飛びきりの…命を粗末にするやつは別だがな…』

双剣を仕舞うマサムネ

『分かった…ならば、貴殿の強さの理由を…教えてくれないか?

俺の強さの理由…まさか転生したから、なんて言えねえな…

『まあ、食材に、命に感謝して生きれば強くなるんじゃないか?少なくとも、俺はそう信じているからな…』

考え込むマサムネ

『考えた事も無かったな…食材に感謝か…命を無闇に奪おうとは思わないが…調理した食材にそこまで敬意を表した事は無かったな…』

『まあ、普通の奴はそうだよな…てか、お前…料理出来んのか？』

自信ありげに話すマサムネ

『ふふふ…驚いたか？私は剣捌きはまだまだ修行の身だが…包丁捌きは一流だと自負している!!特に魚料理は得意だ!!』

マジか…イメージと違いすぎんだろ…だが…これは面白いかもな!!

『そこまで言うなら、お前の包丁捌き…見せて貰おうか…』

持っていた鞄から包丁を取り出す悠哉

『これは…中々素晴らしい包丁のようだな…』

『今から俺が魚を獲ってくる…その魚を捌いて、俺を満足させてくれる料理を作れたら…修行に付き合ってやる…どうだ？やるか…？』

頷くマサムネ

『当然だ…私は魚料理だけは、誰にも負けない!!』

すげえな…プライドが高いのか…熱意が強いのか…どのみち期待が出来るな…

『よっしゃ…少し待ってろ…今から獲ってくる!!』

３０分後…

『沢山獲れたぞ…大丈夫か…？』

平然と答えるマサムネ

『大丈夫だ、問題ない…』

それはフラグだ…マサムネ…

マサムネが包丁を手に持ち、調理を開始する…

すげえな…流れるように行程をこなしている…無駄な動きが無い…

『何故だ…何処を切れば、上手く切れるかが分かる…今までは、慣れで切っていたのに…』

『それが食材に感謝するって事だよ…そして感謝された食材は答えてくれる…らしいぜ？』

『らしい…とは？』

苦笑いする悠哉

『それを食材の声って言うらしいんだが…選ばれた料理人だけしか聞こえない…云わば、食材に好かれる才能みたいなもんだな…』

『食材に好かれる才能…分かった…お前たち…今すぐに美味しく調理してやろう!!』

更に早い速度で調理をするマサムネ

『出来たぞ!!』

出された料理には、捨てる部分が一切無いような形になっていた…

『ほう…食材の無駄を無くしたか…』

『感謝したならば、無駄な部位等無い!!』

確かにな…これは美味そうだ…では…

『この世の全ての食材に、感謝を込めて…頂きます!!』

物凄い勢いでマサムネの作った魚料理を平らげる悠哉…そのお味は…

『うめえ…』

涙を流しながら食べる悠哉、そして全ての魚料理が無くなる…

『ご馳走様でした!!』

緊張の表情のマサムネ

『どうであった…?』

悠哉は深く目を閉じて…

『美味い…この一言しか出てこないな!!』

満面の笑みのマサムネ

『ならば…!!』

『当たり前だ…合格だ!!食材の声を聞けるやつを…不合格なんかにはしねえよ!!約束通り、修行に付き合ってやる!!』

『本当か!!』

そこまで喜ぶとはな…そんなに強くなりてえのか…そこまでして倒すべき相手か…

『し、しかし…そんなにも…我の料理は美味しかったか…?』

『おう!!あれだけ美味い魚料理は初めて食べたぜ!!』

『そ、そうか…ならば…こ、これからも宜しく頼む!!』

何かさっきよりも勢いが無いが…まあ、いいか?

『自己紹介が未だだったな…今更だが俺は遊佐　悠哉だ…宜しくな、マサムネ!!』

『悠哉か…分かった!!』

さて、修行に付き合うにしても…先ずは足利ヨシテルだな…

『マサムネ…とりあえず、京の都へ行こうと思うんだが…どうだ?』

『京の都か…丁度良い…少し前から、京の都から悪き波動を感じるのだ…』

悪き波動…？なんだそれ…マサムネって案外…中二病か…？

『ま、とりあえず行くか!!』

『ああ!!』

悠哉の仲間に…あの独眼竜の伊達マサムネが加わった…何故か女性ではあるが…

三話～条件

悠哉とマサムネは、京の都にかなり近づいていた…

『そろそろ京に着く頃か？』

『うむ…その丘を越えれば見える筈だ』

二人が丘の頂上に着く

『おお…中々情緒があるな…』

『ふむ…しかし何やら、大きな力が集まっている様だな…この悪き波動と関係があるのか？』

『とりあえず、さっさと行こうぜ!!』

悠哉が一気に丘をかけ降りる

『案外子供っぽいんだな…悠哉…』

『イャッホオォォォォ!!』

某プロ決闘者のように叫びながら走り抜けて行く悠哉

『悠哉…何故そんなにも目立つ真似を…』

悠哉がマサムネに目で合図を送る

（後ろに居る奴ら…マサムネも気付いているんだろ？）

マサムネは理解した…それを踏まえて悠哉に目で合図を返した

（なら、ここで迎え撃った方が良いのでは？）

（もしも、京の都の兵士だったら、都に行くのに厄介だろ…？下手をしたら、都に入れなくなる…だから、ここでは、やり過ごす…）

（了解した…このまま京に突っ込むのか？）

頷く悠哉

『このまま…入った方が手っ取り早い…暴れる訳でも無いしな…』

後ろに居た兵士が弓を放ってくる

『ま、これくらいなら避ければ問題ないしな…それに…あの兵士…様子がおかしい…関わらねえ方が得策だ』

『確かに…何かに怯えている!?』

兵士が叫ぶ

『お前たちも…松永軍の者か!?』

『松永軍って何だよ…？』

『しらを切るつもりか!!』

松永軍って何ぞ…松永…歴史の授業で習った気がするんだが…覚えてないな!!

『松永軍…お前達はどこの兵士だ？松永軍は、足利軍の傘下の軍であろう!?』

『なら、問題無くないか？』

傘下って事は、味方って事だろ？

『あくまでしらを切るか…ヨシテル様に反旗を翻しておいて!!』

話が一方通行だな…反旗って事は、裏切ったか…

『なあ、マサムネ…松永ってどれくらいの勢力があるんだ？』

『そうだな…幕臣の中では、かなり強い勢力ではあるが…しかし、将軍家に勝てる程ではないな…』

成る程…だとしたら…

『何かの後ろ楯がある可能性が高いな…かなり強いだろう…、天下を持っていく訳だしな…』

『しかし、将軍家も、かなり衰退しているのは確かではある…ここで幕臣の反旗は辛いであろう』

将軍は強いって噂だが、数の暴力には勝てないか…

『とりあえず、急いだ方が良さそうだな…さっさと兵士を片付けるかな…』

『手は出さぬのでは無かったのか？』

『なあに…ちょっと威嚇するだけだ…手は出さないさ…』

悠哉がそう呟くと、悠哉の背後に赤い鬼の様なオーラが現れる…それを見て、兵士だけではなく、マサムネも恐怖を覚えた…

『き、貴様!!それは一体…』

兵士が悠哉に向けて、恐れながらも問いかけると、鬼のオーラが声を出した…いや、声を出した様に聞こえたのだ…そう…

『『喰らってやろう…』』と、そう聞こえたのだ…

そして、その場に居た兵士達は…気絶した…

『さてと…行こうか』

『今のは…一体…何だったのだ…悠哉…』

『何って…鬼だけど…?』

平然と答える為に恐ろしくは聞こえないが、マサムネはやはり動揺している様子だった…

『恐いか…?』

『……少し…恐いな…我を臆病者と笑うか?』

『いや…臆病って事は悪い訳じゃない…勇気と無謀は違うからな、人間は臆病なくらいが丁度良いさ』

『そうか…では行こうか…悠哉』

そう言って二人は京の都に入った…

都の入り口に兵士すら居ないな…本当に不味い状態らしいな…そしてさっきの兵士達は、何に怯えていた？松永軍とか言っていたが…あれは人間に対する怯え方じゃない…何かがある…

『悠哉…考え事か？』

『まあな…松永軍…一体どんな奴らなのか…ってな』

『都の入り口に兵士も居なかった…確かに、衰退したとは言え、都に兵が配備出来ない程では無いはず…疑問も尤もだ…』

『ま、将軍に会ってみれば分かるかもな？白き剣聖にさ!!』

悠哉は楽しそうだな…そんなにも将軍に会いたかったのか？やはり美しいと言う噂に惹かれて…？……なんだかイライラしてきたな…何故だ…？

『マサムネ？どうかしたか？』

『いや、少し悠哉を殴りたくなっただけだ…気にするな…』

『気にするわ!!何でだよ!?』

『すまない…忘れてくれ…』

『お、おう…』

何で怒ってんだ？まさか…

『腹が減ったのか？』

『……違う』

ハズレた…しかも更に不機嫌に…

そんなやり取りをしていると、不意に後ろから声を掛けられた…

『あなた達は…この城下町の者ではありませんね…？』

『そうだが…何だ…あんた、何か用か？』

悠哉達に声を掛けた女性は、白を基調とした衣服に、腰に見事な業物の刀を刺しており、長い金色の髪をしている、百人に聞けば、百人が美女と答えると言える程の美しい女性だった…

『あなた達は…強いですね…お願いがあります…』

『いきなり初対面の奴にお願いがありますって言われてもな…先ずは名乗れよ…俺は遊佐　　悠哉だ』

女性が名乗った名前は意外な物だった…

『私は…第十三代将軍…足利ヨシテルです』

『貴女が…足利ヨシテル殿!?噂に聞く白き剣聖…』

照れくさそうにするヨシテル

『その呼び方は…あまり…恥ずかしいので…』

『確かに中二臭いな…まあ、噂通りに強いなら良いが？見たところ…マサムネよりは強いみたいだが…』

あ、マサムネが少し落ち込んだ…だが事実だからしょうがない…

『いえ、私は…弱いです…それで…お願いなのですが…』

『松永を倒す為に力を貸せ…とかか？』

図星みたいだな…

『はい…』

『自分の部下の不始末は自分で片付けろよ…』

悠哉の一言に、苦言を呈するマサムネ

『悠哉…少し冷たくは無いか…？』

『そうか？天下の将軍様が部下に謀叛をされる時点で底が知れてるだろ…』

どんどんとヨシテルの表情が暗くなる…

『確かに…そうかも知れません…私は弱く、皆を導く力もなく…将軍失格かも知れません…ですが!!民を救いたいのです!!松永軍は、罪の無い民を巻き込んで戦をしています…それを止める為に…力を…貸して頂けませんか…？』

『悠哉…我は…力を貸したいと思う…』

『お前は好きにすれば良い…ヨシテル…俺は力を貸すにあたって、条件を付ける…』

ヨシテルとマサムネが緊張する…

『この国で…一番美味い物を用意しろ…』

『美味しい…物…ですか？』

マサムネは笑っていた

『結局は食い気なのか…』

『少なくとも、マサムネの魚料理よりは美味くないと駄目だ…じゃないと、細胞が進化しないからな…』

『さ、細胞？何ですか？』

『此方の話だ…』

『わ、分かりました…一番美味い…何でしょうか…？』

ヨシテルは意外な要求に戸惑っていた…ヨシテルは一体どうするのか…

四話～女神との再会

俺は白い空間に居た…確か、転生の空間だったかな？

『5日ぶりね!!元気してた？』

『してたけどよ…何の用事だ？』

いきなり呼ばれるとは予想外だったからな…

『いえ、ちょっとね？進んでしまっているトリコの原作を読んで貰おうかと…』

『今更どうしてだ？』

『簡単な話がね？原作の知識が無いと、発動しにくい技が多くてね？特典をあげた身としては、最後まできっちりとしないとな～って思ったりして』

きっちり…ね…

『あら？不満そうね…？』

『きっちりって言うなら、トリコの嗅覚付けてくれ…』

あれ？女神が驚いている？何故だ？

『嗅覚…付けた筈よ？』

『は？至って一般人な嗅覚なんだが…？』

考える素振りの女神…

『可能性があるのは…あの小娘の仕業ね…人間の分際で…元々、卑弥呼ちゃんも悪いのよね!!』

『何を言っているんだ…?人間の分際でとか…悪役の台詞だぞ…』

『ごめんなさい…嗅覚は、条件を満たさないと手に入らないみたいね…』

条件?なんだそれ…神の力を凌ぐ人間でも居るのか…?

『その条件はね?』

『何だ?』

『とある呪術士を倒して欲しいの…』

呪術士って何だよ…すげえ嫌な響きだよ…

『呪術士って…呪いとかだよな…?』

『そうよ…』

『そんなのが、神の影響を受けた転生者に、何かしら妨害みたいな事が出来るのか?』

俯く女神…

『実は、その呪術士の力の根源は、卑弥呼なのよ…』

卑弥呼って言ったら、あの女王の卑弥呼か？だが…

『いくら歴史で名を残す程の人物でも、不可能じゃねえか？』

首を横に振る女神

『彼女は次元が違うのよ…神に…世界の祖である創造神に愛された人間だから…』

『……理解できないな…何を言っているんだ？戦国乙女って、よく知らないが、アニメとかじゃねえのか？』

頷く女神

『そうなんだけど…色々と事情があるのよ…ごめんなさい…』

『……てかさ…勝てるのかよ…いくらトリコの力を持っていても、その存在がチートみたいな呪術士に…』

難しい表情をする女神

『大丈夫の筈よ…その呪術士は、謂わば卑弥呼の闇の力の部分よ…卑弥呼の善の力を持った者が、そっちの世界に居るから、その人物と共闘すれば必ず勝てる筈よ!!』

なら良いが…さて…原作を読むんだったか…

『そうそう!!原作をここで読んでね!!』

『ここでかよ!!』

トリコのコミックスが現れる…

『仕方ないな…先ずは食林寺を目指すところからか…』

悠哉がコミックスを手に取る…

『成る程…恵方巻……具材集め……』

『真剣に読んでるわね…』

好きだからしょうがないだろ…

『成る程…感謝の気持ちで技のパフォーマンスを上げるのか…更に無駄な動きを無くして…』

それで食没か…成る程…便利だな…

『食義をマスターして、５０連まで撃てるように…スタージュンも強いな…』

２時間後…

『アルティメット…ルーティーン…』

『もうそこまで読んだの!?早くない!?』

『そうか?でも、確かに食義や、食没なんかは知らないと分からんな…ネイルガンの発想とかもな…』

正直、腕の負担とかが半端じゃ無さそうだからな…

『今、ここで練習してみる?』

そう女神が言うと、巨大な山が現れる

『トリコがネイルガンで砕いた山と同じ山を持ってきました!!』

『おいおい…マジかよ…ま、やってみるかな…』

悠哉が拳を握りしめ、山に向かって集中する…

『ハアアァァァァ…!!』

腕に力が集まっているのが見てとれる…

『５０連!!ネイルガン!!』

山に向かって力が込められた腕を振り抜くと山が、跡形もなく砕けた…

『確かにすげえ威力だが…腕がヤバイな…連発するなら、３０連くらいで抑えないと無理だな…トリコの力を持っていても、トリコ並みに頑丈って訳じゃないからな…』

『凄いわね…グルメ細胞が有るにしても、これは普通の人間だった貴方には相当辛いわよね…』

笑う悠哉…

『だが…使いこなせれば…大丈夫だろ?後は、アルティメットルーティーンか…あれはゆっくりやるしかないな…思い込みの力か…難

しいだろうしな…』

『そうね…そろそろ時間が来たみたいだし…またね～』

『ああ…また来るだろうな…宜しく頼む…』

そう言って、悠哉は目が覚めた…

『おはようございます…』

『何をしてるんだ…？お前は…』

悠哉の目の前にはヨシテルが居た…そう…所謂土下座スタイルで…

『将軍が土下座って…携帯があったら写メ撮ってたな…で？何で土下座してんだよ？しかもこの宿にどうやって入った？』

『それは言えません…あと、土下座の理由ですが…全然思い付かないんです…美味しい物が…』

笑うしかないな…食べ物が原因で土下座する将軍か…逆に、真面目過ぎるんだよな…肩の力を抜けよ…

『まあ、ゆっくり考えろ…納得いったら、出してくれれば良いからな…？どのみち、マサムネの修行はしないとならねえから、マサムネが力を貸すなら、お前に付いていく事になるしな…』

『そうなのですか？……所で、遊佐殿と伊達殿は、どういった関係なのですか？』

マサムネと俺の関係…か…

『簡単に言えば、俺が修行を見てやって、その代わりに、料理を作って貰う…だな』

『修行の見返りに料理を…ですか？変わってますね…』

まず、自分が人に戦いを教えるとは思って居なかったがな!!

『普通が分からんがな…師弟関係とかよく知らんし…』

『私も…修行を見て貰っても…良いですか…？』

『お前の修行を？何でだよ…』

大体予想はつくがな…

『私は…強くなって、民を守りたいのです!!』

『……予想通りすぎてつまらん…』

『酷いですね…人の決意を…』

あ、拗ねた…拗ねる将軍…シュールだな…

『まあ、良いぞ？修行…見てやるよ』

『本当ですか!?』

試したい事もあるしな…それに、将軍との良好な関係は重要だろう…呪術士を探す時に楽になるかもしれん…

『条件が…あるんでしょうか？』

『そうだな…じゃあ、今は良いが…人探しをいずれ手伝って貰うか…』

『人探し…ですか？まさか、想い人ですか？』

女ってそう言う話題が好きなのか…？

『いや…性別すら分からんな…』

卑弥呼の闇の力の部分って言うなら、女かも知れんが…

『そうですか…分かりました!!時が来たら、ご協力させてもらいます!!』

『さて…マサムネが外にいるはずだ…行くか…』

外で双剣を振るっているマサムネに声を掛ける

『マサムネ、今日から修行を本格的に始めるぞ…』

『……』

『どうした？マサムネ？』

何で地味にジト目なんだよ…めっちゃ睨まれてるよ…ヨシテルも睨まれてるし…

『……昨夜は…お楽しみだったか？』

『は？』

『昨日の夜中から、ヨシテル殿の気配が悠哉の部屋からしていたが？』

昨日の夜中から？まさか…

『お前は…何時から俺の部屋に居た…？』

『貴方が寝入ってからです…』

『気配がしなかったが？』

『監視は側近にさせていましたから…腕はたちますよ？』

なんだよ、何で部下が優秀なんだよ…それよりも…

『怖ぇよ!!朝起きたら、土下座してんだぞ!!実際は不法侵入の土下座か!?』

『悠哉…本当に…何も無かったんだな…？』

『当たり前だ…』

『なら良いが…修行を本格的にするのか？何をするんだ？』

急に本題に戻ったな…

『簡単だ…ヨシテルと戦って貰う…』

『何!?何故だ!?』

『私も初耳ですが…何故ですか？』

『二人の実力が知りたいからな…修行の内容を決めるのはそれからだ…』

『分かった…ならば、全力で行かせていただくぞ!!ヨシテル殿!!』

マサムネが双剣を構える

『此方も…本気で行きます!!』

ヨシテルも刀を抜く…

『さて…それじゃあ…始めるぞ…始め!!』

悠哉の号令で二人が激突する…勝負の行方はいかに…

五話～竜王の牙

『始め!!』

悠哉の号令で二人が激突する…お互いに武器が近接武器のため、すぐに激しい打ち合いとなった…

やっぱりヨシテルの方が地力は上だな…マサムネみたいな双剣を使う奴が少ないから、今は攻めきれて無いが…時間が経てばマサムネが負ける…逆に短期決戦なら、マサムネに分がある…さて、どうなるか…

『くっ…やはり将軍…強い!!』

『貴女も中々お強いですよ…その流れるような剣捌き…素晴らしいです!!』

やっぱヨシテルの方が余裕があるか…

『確かにヨシテル殿の方が強いと見える…だが、我も簡単にはやられはしない!!喰らえ!!双竜連斬!!』

マサムネの双剣から竜のオーラのような物が現れる…

『成る程…それが貴女の奥義ですか…なら、私も全力で行きます!!天剣一刀雲切り!!』

ヨシテルが刀を思いっきり抜刀する…マサムネの技に比べて迫力は無いが…

『すげえな…無駄な動きが一切無い…だからこそ威力は…絶大だ…』

悠哉の言葉通り、マサムネの双竜連斬はヨシテルの刀に粉砕された…それを見たマサムネは、屈辱に思うよりも…

『何と…美しい剣技か…』

ただ感動していた…

『ヨシテル!!お前の勝ちだな…』

『そうだな…言い訳出来ぬ程に…完敗であった…流石は将軍…強い…』

首を横に振るヨシテル

『いいえ…私は弱いです…だからこそ…遊佐殿にご教授願いたいのです!!』

ヨシテルは悠哉に頭を下げた…

『お前って将軍なのに、腰が低いよな…将軍だったらそんなにホイホイ頭を下げるなよ…』

『ですが…』

まあ、これだけ誠意があるから国民に好かれるのかね…

『さて、修行だが…ヨシテルはまずは、普通に筋力を多少鍛えろ…じゃねえと体が持たんぞ…』

『筋力を…ですか?』

意外そうな顔をしてるな…

『正直、俺は剣技は余り得意じゃねえからな…ナイフとフォークや、釘パンチを使っちゃいるが、近接戦闘でも、刀とはかなり違うからな…』

不思議そうな表情をするヨシテルとマサムネ

『悠哉…ナイフとフォーク、釘パンチとは何だ?』

『聞いた事がありません…』

そう言えば話して無かったんだな…てか、此方でまだまともに戦闘してなかったか…

『説明が面倒だが、簡単に言えば、俺の腕が刃物みたいに、相手を切り裂けるようになるのがナイフ…で、フォークが相手を槍のように突き刺せるようになるんだよ…釘パンチは…そうだな…ほぼ同じ場所に何発も打撃を加えられるのが釘パンチだな…』

いまいちピンと来てないみたいだな…よし…

『あの岩に釘パンチをする…見てろよ?』

『あの岩にですか!?かなり大きいですが…』

『確かに…悠哉…大丈夫なのか?』

悠哉は無言で岩の前に立つ…そして岩に向かって右腕を振り抜いた…

『5連!!釘パンチ!!』

悠哉が岩に釘パンチをすると、岩がぶっ飛び、4回跳ねながら、5回目の衝撃で砕け散った…

『あ～…トリコだったら、3連釘パンチくらいで壊せてたかもな…まあ、良いか…見てたか？これが釘パンチだ…同じ場所に衝撃を与えて内部から破壊する技…だったかな…？』

ヨシテルとマサムネは釘パンチを見て、絶句していた…

『あの岩をあんなに簡単に破壊するとは…双竜連斬並みの威力だ…』

『あの…』

『何だ？ヨシテル』

『さっきの5連とは、何の事でしょうか…？』

こいつ…一回見ただけで、それに気付くか…観察力は人一倍か…

『さっきのは、5連…つまり、一瞬で同じ場所に5発打撃を加えたんだ』

『5発が最大なのですか？』

『いや、最大は現時点では50連だな…』

私の想像よりも二倍以上の数を行っていた…遊佐殿…貴方は何処まで…

『先程の十倍ですか…山でも砕けそうですね…』

『ヨシテル殿…いくらなんでもそれは無いのでは…』

『実際砕けたぞ…山』

まあ、釘パンチじゃなくてネイルガンだけどな…また話すとめんどいから話さんが…

『悠哉…一人で天下を獲れるのでは…?』

『俺は天下に興味は無いからな…?』

天下に興味は無い…それほどの力が有りながら…遊佐殿は何故…何を目的に生きているのか…

『んで、次にマサムネだが…まずは、座禅だな…それを一週間続けて貰う…』

おおう!?すげえ不満そう…

『何故だ…?我は剣の修行を…』

『嫌なら辞めて良いぞ?自力で強くなれ…俺は構わんからな…?』

『……分かった、座禅だな…』

めっちゃ不満そうだが…仕方無いだろ…

『さてと…ヨシテル…一つ気になった事が有るんだが…』

『何ですか？』

俺が気になったのは…

『その刀は…何を素材に作られている？』

マサムネの双剣もだが…何かが普通と違う気がするんだよな…

『鬼丸国綱ですか？』

『そうだ…普通と違う気配がするが…』

『聞いた話では、竜王…つまり、竜の牙を使っているらしいですよ？嘘か真か知りませんが…その竜王の名前は…確か…デロ…何でしたかね…？』

竜王…つまり…

『竜王デロウスか…？だとしたら…』

『確かその様な名前でした!!知っているのですか!?』

竜王デロウス…確か小松の包丁の素材だったな…一振りするだけで山をも切り裂く…何故この世界にデロウスの牙が？そしてどうやって加工したんだ…？

『竜王デロウスは、その昔に、牙一つで世界の覇者になったと言われた竜らしいが…詳しくは分からん…』

『世界の覇者…鬼丸国綱がそんな牙を…』

『悠哉…何故そのような事を知っている？我は…少なくとも、竜王等は知らないが？』

まずいな…誤魔化すか…

『……まあ、伝説みたいな物だからな…地方によっては知られてないだろう…』

どうだ…？

『そうだな…しかし、それほどの牙とぶつけて無事な我が双剣も…何かしら特殊な物でも使っているのか？』

『お前は何も知らないのか？』

ヨシテルの刀は、素材を覚えていたが…双剣の素材によっては…

『残念だが…詳しくは知らぬ…』

『そうか…ヨシテルは、その刀は何処で手に入れた？』

鬼丸国綱を見つめるヨシテル

『この刀は…代々受け継がれている銘刀です…大昔に刀鍛冶が献上したと言われています…その刀鍛冶は姿をすぐに消したそうですが…』

『そうか…分かった、だが、その刀の扱いには気を付けろよ…今はまだ、本来の力では無いみたいだからな…』

『そこまでの力がこの鬼丸国綱に…？確かに銘刀とは言われてますが

…』

山をも切り裂く刀って言ったら信じるか…？いや、やめておくか…

『まあ、分からねえ事を話しても仕方ねえ…修行を始めるぞ…』

『承知した!!』

『宜しくお願いします!!』

こうしてヨシテルとマサムネの修行が始まった…

六話～刃頭雨流との交戦、そして不可侵大陸

修行を始めて三日…三人は、京から尾張に向かって移動していた…

『尾張の織田ノブナガね…味方に出来るのかよ…ヨシテル？』

『そうですね…恐らくは、確率は半分といったところでしょう…』

『そんなに協調性が無いのですか…？ヨシテル殿…』

噂ってか、歴史通りなら一筋縄では行かねえだろうな…だが、珍しい物が好きなら、やりようはあるか…

『遊佐殿…しかしこれは一体…？かなり重いのですが…』

ヨシテルは悠哉に苦言を呈した…ヨシテルの両腕と、両足には、錘が付いているからだ…

『筋力を多少鍛えろって言っただろ…？』

『多少の重さでは無いのですが…』

まあ、この山道で錘が各２０kgはしんどいだろうが、それくらいはやってもらわなければ意味がねえ…

『ま、頑張れ…その馬に乗らないだけ、ましだからな…因みに俺は今、お前の５倍の錘を付けているからな…？』

『そんなにですか!?』

『大丈夫だ…お前も直ぐに慣れるさ…』

また殺気だよ…ヨシテルにお前って言うと殺気が飛んでくるな…ま、ヨシテルもマサムネもスルーしてるから、俺も無視してるが…

『すみません…遊佐殿…私の部下が…』

『別に気にすんな…実害が有るわけでもねえし…』

『しかし悠哉…このままでは尾張までかなり時間がかかってしまうぞ…』

仕方無いだろ…とりあえず、修行しながら移動するんだからな…にしても、マサムネまだ不満そうだな…ん？何かが…来るな…

『遊佐殿!!』

『悠哉!!』

『分かってるよ…とりあえず、構えろよ…!!』

構えたのは良かったが…想像よりも厄介そうな奴が出てきたな…

悠哉達の目の前に現れたのは、三つ首の禍々しい姿をした化物だった…

『あれは…刃頭雨流!!』

『あ？バズーカ？』

『刃頭雨流…（バズール）です！』

『何と禍々しい…ヨシテル殿…この妖怪を知っているのか⁉』

バズールって…随分と戦国ぽく無い名前だな…

『奴は魔獣・刃頭雨流…松永の使役する怪物です！その力は絶大で…町を一つ滅ぼす程です‼』

『ヨシテル様‼ここは一旦離れた方が良いのでは⁉』

眼鏡の忍者か…こいつが俺に殺気をぶつけてきたやつか…

『ですがミツヒデ‼ここで我々が刃頭雨流を止めなくては…近隣の村が襲われます‼』

確かにな…さて…どうするか…

『悠哉‼戦うぞ‼』

『行きましょう‼』

ったく…

『断る…』

『悠哉⁉』

『な、何故ですか⁉』

『貴様‼ヨシテル様の御命令だぞ‼』

こいつら…

『俺はあくまで修行を見てやるだけだ…お前らの助けをするとは言ってねえ…それに、この魔獣は松永の魔獣なんだろ？本来なら、ヨシテルとヨシテルの部下の眼鏡忍者だけで戦うべきだろ…？違うか？』

『貴様!!ヨシテル様は民の事を考えて…』

『黙れよ…野生の戦いに情は関係ねえ…ほら…来るぞ？』

刃頭雨流の額からヨシテル達に向けて光線が放たれる…

『くっ…見損なったぞ悠哉!!罪の無い人々を巻き込むような奴は許さないのでは無かったのか!?』

『その刃頭雨流ってのが、人間だったら戦ってやったが、そいつは獣だろうが…獣には、知能があっても理性は無い…結局は、どんなに躾られても、本能で戦っている…』

『貴様…何が言いたい!?』

『私は…遊佐殿の言うことは何となく分かります…ですが…』

ヨシテルは分かっているか…なら…

『別に俺も、むざむざ殺されろとは言ってねえ…喰われたくなければ全力で戦って勝てよ…それが弱肉強食…野生の戦いだ…』

全力で戦って勝つ…それが野生の戦い…ならばこの足利ヨシテル全力で勝つのみ！

『天剣一刀雲切り!!』

ほう…中々いい斬撃だ…本気で狩るつもりらしい…そうだ!!それで良い!!ヨシテルには、野生が足りない…勝ちに拘る事がねえからな…民さえ助かればそれで良いなんて考えだけでは…生きていけないからな…

ヨシテルの渾身の一撃を喰らい、刃頭雨流が怯む…その隙にミツヒデとマサムネが追撃をかける

『喰らえ!!双竜連斬!!』

『朱雀剛爆砕!!』

二人の奥義を受けて、刃頭雨流は倒れた…

『勝ったのですか…?』

『みてーだな…おつかれさん…中々いい感じだったぜ』

『貴様…今更何をぬけぬけと!!』

何でこいつは俺に突っ掛かって来るんだよ…

『止めなさい…ミツヒデ…』

『はっ…申し訳ありません…』

ミツヒデねえ…あの明智ミツヒデだったら、天下の逆賊か…おもしれえ…!!

『悠哉!!何故戦わなかった!!』

『分かってねえなら、修行を中止して、頭を冷やせ…お前は冷静に見えて、案外熱い奴だからな…周りをよく見て、客観的に行動しろ…ヨシテルが刃頭雨流を攻撃する前から、かなりの隙が刃頭雨流には有った筈だ…』

『くっ…』

苦虫を潰したような表情をするマサムネ…

『別にお前が弱い訳じゃねえ…だが、お前はまだ力が上がる…だからこそ、冷静になれよ…民も大事だが、刃頭雨流は獣でしかない…例え作られた命であってもだ…』

『作られた命…!?どう言う事でしょうか…?』

何でそんなに驚いてるんだよ…普通に三つ首の魔獣とか、野生で居ないだろ…

『明らかに野生であんなの居ないだろ…?』

『不可侵大陸から来た魔獣との噂がありましたが…』

不可侵大陸?まさかグルメ界みたいな所か?

『不可侵大陸って何だよ?』

全員が驚いた顔をしてるな…また質問をミスったみたいだな…

『貴様…ヨシテル様、やはりこの様な男にヨシテル様の修行を見せる

など…私には耐えられません!!どうかお考え直しを!!』

『悠哉…』

『遊佐殿…本当に知らないのですか…?』

うわー…全員から可哀想な物を見るような目で見られてる…さっきまで半ギレ状態だったマサムネにまで…そんなに知られているのか…

『仕方がありません…説明します…不可侵大陸とは、未だに人間が把握出来ていない大陸があります…その大陸に、入った者は数え切れない程に居ました…しかし…帰って来た者は居ません…』

おいおい…マジでグルメ界その物だな…

『しかし…運良く帰還出来た人間が居たのです…』

もう既に察したんだが…

『帰って来た人間は、不可侵大陸を…地獄だと言いました…恐ろしい魔獣が数え切れない程におり、その大地は呪われ…とても人間が住める環境では無かったと…今まで、帰って来た者が居なかったのが、余りにもその大陸が素晴らしく、戻る必要が無かったとされており、理想郷とも思われていた、不可侵大陸は恐怖の象徴とされているのです…』

結論…グルメ界だな…完全に…

『ですので、不可侵大陸は危険な場所とされ、近接される土地は、立ち入りが禁止され、その情報は全国に広まったのですが…ご存知ありま

せんか…？』

『成る程…じゃあ、ここから一番近い不可侵大陸の入口は何処だ？』

『遊佐殿⁉まさか不可侵大陸に入るつもりですか⁉』

うわー…全員マジで焦ってるな…

『入らねえよ…ただ、何処の近くが危険か知りたいんだよ…』

確か戦国時代って外国とかの交易とかすら、余り出来てない筈だよな…なのに、隣接する場所にグルメ界…どうなっているんだ…この世界は…

『ここから近いのは、尾張の地獄門と言われる場所ですね…』

『尾張なのかよ‼大丈夫なのかよ⁉猛獣とか、グルメ…いや、不可侵大陸から入ってこないのかよ⁉』

『大丈夫です…何故か…この国は、巨大な結界に守られていますから…古の時代からしいですが…』

女神が言ってた、卑弥呼の仕業か…？

『悠哉…本当に何も知らないのか…大丈夫か？』

『やはり貴様はただの馬鹿の様だな…ヨシテル様に近寄るな…下衆が…』

ひでえ言われようだな…

『さあ…刃頭雨流を倒しましたし…尾張に急ぎましょう!!』

ヨシテルがそう言った直後に、倒した筈の刃頭雨流が消えたのだ…

『何故…刃頭雨流が消えたのだ…?』

今のは…まさか!?

『眼鏡忍者…その疑問は簡単だ…松永の元に戻ったんだろうよ…そして、刃頭雨流を作ったのは…呪術士だ…』

『呪術士…ですか…?何故そう思うのですか?』

『術式みたいな物が見えなかったか?』

げっ…全員首を傾げている…見えて無かったのか…

『貴様は呪術に詳しいのか…?』

『いや…そこまでは…』

『ならば適当な事を言うな!!』

マジでキレてるな…どうするか…

『呪術ですか…あり得ない話ではありませんよ…ミツヒデ』

『確かにな…悠哉の力も不思議だが…呪術では無いのか?』

『自分の体を呪術で強化とか…怖すぎるからやらねえよ…出来ねえしな…』

まあ、あくまで予想だしな…

『居なくなった刃頭雨流は、いずれ探さなくてはなりません…しかし、先に尾張を目指すのが先決…行きましょう!!』

『はっ…ヨシテル様の御命令とあらば!!』

『悠哉…行くぞ…』

『まだ拗ねてるのかよ…』

『いや、もう気にしていない…言われた事は…間違っていないからな…私も精進しなくては…』

マサムネも物分かりは良いんだけどな…人の事になると、熱くなるんだよな…

そんな事を考えながら進む四人を背後から見ている物が居た…

『我の作った刃頭雨流を、ああも簡単に倒すとは…中々強い…やはり刃頭雨流を強化すべきか…ククク…滅ぼしてやるぞ!!戦国の乙女達よ!!』

七話～尾張の野蛮人

刃頭雨流を倒して一週間…悠哉達は、尾張の城下町に到着した…だが…

『織田が戦の真っ最中とはな…ヨシテル…どうすんだ？』

悠哉が大量の団子を手に、話しかける…

『貴様…そんなに食べれるのか…？と言うよりか代金はどうした!!』

『持ち物が高く売れたからな…金はかなり有るぞ？』

そう…悠哉は尾張に着いてから直ぐに持ち物を売ったのだ…何故、尾張で物が売れたのかと言うと、織田ノブナガの趣味で作った、珍しい物なら何でも買うと言う店があったからだ…

『一体何を売ったんですか？』

『ボールペンと、トリコのシールと、空き缶』

はっはっは…最後のはゴミだけど、一番高く売れたぜ!!

『聞いたことが無い物ばかりですね…』

『まだ、すげえのがあるけどな…それは、織田に会ってからだな…』

『本当に悠哉は何者なのだ…？』

めんどいから、正直に答えるか…

『俺は未来から来たんだよ…』

『『嘘だな（ですね）』』

『全員即答かよ!?』

何でだよ…あながち間違っていないんだが…

『未来でも、不可侵大陸を知らない可能性は低いだろう…』

『未来の人間がこんなにも馬鹿な筈が無い…』

『遊佐殿…もう少し信憑性がある話を…』

マサムネと、ヨシテルはまだ許そう…

『眼鏡忍者…正座しろ…』

『私の名前は明智ミツヒデだ！』

『五月蝿い…駄眼鏡…』

『貴様!!』

さて、からかうのは、これくらいにして…

『ヨシテル…織田が何処と戦してるか分かるか?』

『今川ですね…』

『恐らくは、徳川も居るだろう…』

織田…今川…徳川…すげえな、しかし、全員女になってるのか…？

『貴様!!無視をするな!!』

そろそろウザいな…

『喰らえ!!団子の串!!』

悠哉がミツヒデに向かって、大量の団子の串をクナイの様に投げる

『フッ…私に向かってクナイに見立てて投げるとはな…愚か者が!!』

向かって来る串をクナイで全て撃ち落とした…だが…

『居ない!?』

すると…上空から、某レトロゲームの主人公の様な声で…

『上から来るぞ!!気を付けろ!!』

悠哉がミツヒデ目掛けて落ちてきた…

『のわぁ!?』

間一髪でミツヒデが避けるも、バランスを崩して尻餅を着いてしまう…

『俺の勝ちだな…』

悠哉はミツヒデの首筋に手刀を突き付けていた…

『不意討ちとは卑怯な!!』

『裏を欠くのは戦いの常識だろうが…負け犬の遠吠えだな…』

ミツヒデは怒るかと思われたが…

『……グスン…』

『何故に泣く!?』

『悠哉…女を泣かせたな…』

『遊佐殿…』

何でだよ!?俺が悪いみてえじゃん!?

『ヨシテル様の目の前で…こんな屈辱…許さん…グスン…』

『……俺が悪いのか…?』

『ああ…』

『はい…』

『貴様が……悪い!!』

『何でだよ!?お前が言うなよ!!』

マジか…俺が悪いのか…

『すまなかった…』

悠哉はミツヒデに頭を下げた…すると…

『土下座しろ…』

『良い度胸だてめえ!!俺のナイフの錆びにしてやろうか!?』

『遊佐殿…案外面白い方ですね…』

『久々にはしゃいだら疲れた…さっさと織田の所に行こうぜ…』

『チッ…』

眼鏡忍者の奴…舌打ちしやがった!?

『悠哉…早く行くぞ…?』

『さっさとしろ…能無し…』

『ミツヒデ…遊佐殿に対しては、何故そんなにも…』

『ヨシテル様…私は、あの男が嫌いなのです…』

『何故そんなにも、素顔を見せるのですか!?遊佐殿の事が好きなのですか!?』

何でだよ…やっぱり女はそう言う話題が好きなのか…?

『ヨシテル様…慣れない冗談はお止めになられた方が良いのでは?』

『ですね…私も慣れない事はするべきではありませんね…』

『ヨシテル殿…悠哉はもう行ってしまうぞ…？』

めんどいから、さっさと置いていこう…

『待ってください!!』

『待たぬか馬鹿が!!』

マジで置いていこう…

尾張の国境付近の平原で、織田軍と、今川軍が戦をしていた…

『相変わらずしつこいのう、お嬢!!』

『五月蝿いですわよ!!野蛮人!!今日こそ決着を着けますわ!!』

この言い争っているのが、両軍の大将…巨大な大剣を持った赤い髪をした女性が、あの織田ノブナガである…そして、緑色を基調とした、衣服を身に付け、弓を使いこなす長い黒髪の女性が、今川ヨシモトである…そして…

『お館様!!どうします?』

『決まっておるじゃろう!!殲滅じゃ!!行けぃ!!サル!!』

『お姉様!!大丈夫ですか!!弥呼!!』

巨大な瓢箪の様なハンマーを葵の紋章が受け止めた…このハンマーを使っている少女が、豊臣ヒデヨシ…織田家一の家臣である、そして、葵の紋章を操る、少女が…徳川イエヤス…歴史に名を残す英傑達である…しかし、その場にいきなり現れた男によって、場の空気は一変する…

『うわー…やってるやってる…すげえな、まさに最強決定戦!!って感じだな…』

いきなり戦場に丸腰で現れた悠哉にその場に居た全員が驚いた…

『お主…何者じゃ…?』

『いきなり人の戦いに割り込んできて…この野蛮人と、同じくらい無粋な人ですわね!!』

いきなり不評だな…マサムネ達は、まだ追い付かねえし…

『俺の名前は、遊佐　　悠哉だ…』

こやつ…いきなり現れたが…とんでもない化け物じゃな…

『サル…こやつには手を出すな…まだお主では勝てん…』

『うう…お館様がそう言うなら…』

さて…目的はなんじゃろうか…？

『貴方…目的はなんですの？』

『俺の目的は…』

全員が緊張する…

『俺の目的は…美味い物を食うことだ!!』

その場に居た全員が…理解出来なかった…

『また面白そうな奴が出てきたのう…』

次回に続く。

八話～食べるの…ですか…？

悠哉がノブナガと、ヨシモトの戦いに割り込んで、数分が経過した…

『ですから!!貴方の目的はなんですの!?』

『さっきから、無限ループなんだが…馬鹿なのか？』

『お嬢が馬鹿なのは、周知じゃろう!!』

『お黙りなさい!!野蛮人!!』

そんな言い争いが続いていた…

なんなんだよ…この今川ヨシモトは…？マジでただの馬鹿だな…もう3回目だぞ…

『して？美味い物を食う…じゃったか？』

『ああ!!俺の目的はそうだな!!』

『俺の？他の奴がおるのか？』

そう言えば、遅いな…あいつら…何をやってるんだ？

『他の奴も居るが…まあ、まだ協力関係では無いけどな？協力するなら、美味い物を用意して貰わないとな…』

『食べる事ばかりですわね…』

それの何が悪い!!

『食は、人間の全てだろうが!!食わなきゃ生きて行けねえ!!その分、食に感謝しろ!!』

『いきなり何ですの!?』

食は偉大だろうに…全く…ん？

『そこの魔法少女…何だよ…じっと見て…』

『食は偉大…そう仰るなら、いろいろな物を食べていらっしゃるんですよね!?』

すげえ目がキラキラしてるな…てか、こいつ…

『何が一番美味しかったですか!?お饅頭ですか!?金平糖ですか!?』

『何で甘味限定なんだよ!!』

『私が好きだからです!!』

成る程…

『まあ、一番美味かった甘味は…プリン…だな…』

全員が首を傾げている…

あー…この時代は、まだプリンは無かったっけ…

『プリンとは…一体…どんな食べ物なのですか？』

『ワシも気になるのう…』

『プリンっつうのはな…？卵と牛乳を混ぜて、砂糖を加えて、型に入れて、冷やして固めた物だな…カラメルは…砂糖を溶かすんだったかな？』

『美味しそう…お館様…私もプリン食べたいです…』

全員案外食いついたな…

『まあ、デザートは、プリンが良いが…食事だと、やはり肉だな…牛肉が美味いな…』

全員が唖然とする…

『牛を…食べるの…ですか…？』

あー…まだ、あんまり牛を食べる風習が無かったのか…確か、牛を食べ始めるのは、明治からだったか？記憶に無いな…

『中々美味いぜ？』

『ほう…今度ワシも食してみるかのう…』

『にしても…あいつら遅いな…何してんだ？』

その頃ヨシテル達は…

『何故…お前がここに居る!?松永!!』

そう…ヨシテル達は、倒すべき松永軍の将軍…松永弾正久秀と、対峙していた…

『フン…なあに、貴様らと一戦交えようと言う訳ではない…』

松永を見て、ミツヒデが叫ぶ…

『黙れ!!ヨシテル様を裏切る逆賊が!!』

『仕方あるまい…時間が余り無いが…少し遊んでやろう…』

ヨシテル達が身構える…

『来ますよ!!気を付けて!!』

『さあ…始めようか…将軍様!!』

死闘の幕があがる…

九話～松永の目的

松永と、対峙している三人は、動けないでいた…何故なら…

ミツヒデが呟く…

『全く…隙が無い…!!』

『ヨシテル殿…松永とは、此処までの手練れだったのか!?』

首を横に振るヨシテル

『正直…此処まで強い者ではありませんでした…一体…』

松永が笑い出す

『クハハハハ!!下らない常識に囚われている貴様らには、到底理解出来ない領域に私は、居るのだよ!!』

そう言い放つと、刀を一振りする松永、すると刀から、とてつもない斬撃が生まれた…それを紙一重で、避ける三人…

『馬鹿な!?刀を一振りするだけであの威力だと!?ヨシテル様!!ここは一旦下がりましょう!!』

『なりません!!ミツヒデ…ここで下がれば、町の人々の被害は免れません!!』

笑みを浮かべる松永

『ヨシテルよ…未だにそのような下らない事を言っているのか…愚かな!!』

叫ぶヨシテル

『お前には分からないだろう…人を思いやる気持ちが…ならば語る事は何もない!!足利ヨシテル…いざ参る!!』

ヨシテルが松永に斬りかかる…一方その頃、悠哉達は…

『嫌な気配がするな…ヨシテル達が遅れている理由はそれか…?』

眉間にシワを寄せるノブナガ

『お嬢だけなら未だしも…この尾張で好き勝手する奴が居るようじゃな…サル!!城下町に戻るぞ!!』

『はい!!お館様!!』

『良いのかよ…今川を放っといて…?』

笑みを浮かべるノブナガ

『お嬢!!勝負は預けるぞ!!』

その言葉に深く頷くヨシモト…二人の間には、奇妙な信頼性が伺えた…

『まあ、良いか…さて、この気配…急ぐか…』

『なんじゃ…お主も行くのか?』

『まあな…一応修行を見てやってるからな…』

キセルをふかすノブナガ

『意外じゃな…お主の様な奴は大抵人とは距離を置くかと思ったがのう…』

『お館様!!急ぎましょう!!』

物凄い速度で移動するヒデヨシ

『すげえな…何であんなに急いでるんだよ…』

『今、気配がしているのが、城下町じゃからじゃろうな…』

『一般人に危害が及ぶからか…?』

黙って頷くノブナガ、それを見て笑う悠哉

『成る程な…中々面白そうな奴だ』

『そうじゃろう!!サルは面白いぞ!!』

『俺から見たらお前も充分面白そうな奴だがな…』

大笑いするノブナガ

『ハッハッハ!!このワシをうつけと言う奴は多いが…面白いとはな…お主も面白い奴じゃな!!』

『類は友を呼ぶ…って奴か？』

『お館様!!城下町に着きますよ!!』

早いな…てか、こいつら中々の速度だな…流石は織田と豊臣か…さてと…ヨシテル達は無事か？

『城下町が…』

『こいつは…中々酷いな…』

『ふざけた真似を…一体…誰じゃ!!ワシの城下町を破壊したのは!!』

三人が見たのは、瓦礫の山と化した城下町だった…

しかし妙だな…爆発も無ければ、火の手もない…一体…？

『サル!!犯人を見つけて、始末しろ!!

『はい!!お館様!!』

二人は冷静じゃねえな…しかし、この違和感…とりあえず、気配の中心に行けば分かるか…

『おい!!織田ノブナガ!!とりあえず、気配の中心に行けば良いんじゃねえか？』

『……それもそうじゃな…冷静さを欠いておった…サルよ、行くぞ…』

『でも!!お館様!!瓦礫の中に人が居るかも…』

人…？そう言えば、これだけの被害で人が全く…怪我人一人居ない…？……まあ、良いか…とりあえず、気配の中心に行くか…

『お主…この城下町の地形を知っているのか？』

『何でだよ…？』

『この城下町は、迷路の様に作られている…更に瓦礫の山で地形がまともな所は少ないが…お主は、迷いなく進んでおる…』

ああ…そう言う事か…

『地形は知らん…言うなれば、勘だ…』

『勘じゃと!?馬鹿にしておるのか!?』

まあ、そうなるな…普通なら当然だよな…

『普通の勘なら無理だが、直感だからな…第六感だと思え…』

厳密には違うけどな…説明がめんどいから…知りたい人は、トリコを読んでくれ…

『普通の勘じゃない事は解ったが…やはり、一人も人がおらんのう…』

『何処かに非難したんでしょうかね？』

非難か…無理だろうな…少なくとも、怪我人は絶対に居る筈なんだが…

悠哉達は気配の中心にたどり着いた…そこには一人の男がいた…
そう…そいつは松永だった…松永の足下には、ヨシテル達が倒れていた…

『お前が町を破壊したのか？』

意外そうな表情をする松永

『これは驚いた…ヨシテル達の心配より先に、町の心配をするとは…』

『まだ生きてるみてえだし、問題無さそうだからな…』

『お主…酷いのう…』

そんなに酷いか…？いや、それよりも…やはりあの男…

『呪術で、なにかしら細工したか…？』

『ほう…気付いたか…勘が良いな、その通りだ!!私は最高の力を手に入れたのだよ!!』

松永から黒いオーラが溢れる…

『呪術じゃと…？一体何を…』

松永がノブナガに向かって斬りかかる、それをノブナガは、大剣で受け止めるが…

『ぐっ!?なんという力じゃ!!ワシが押し負けるじゃと!?』

ノブナガは、松永の剣戟を受け止めた直後に、後方に吹き飛ばされ

た…

『この!!喰らえ!!』

ヒデヨシが松永にハンマーを振り下ろすが、紙一重で、避けられる

『遅い!!』

『うわぁ!!』

ハンマーを振り下ろした時の隙を突かれて、松永の剣戟をまともに受けてしまったヒデヨシ…

『おいおい…秒殺かよ…呪術だけで此処まで強いのかよ…』

『さて…次は貴様だ!!』

悠哉に向かって松永は構えた…

『向かって来るなら仕方ないな…相手をしてやろう…』

『貴様もすぐに楽にしてやる…』

誰も殺して無くね…?

『私の速さに付いて来られるか!!』

一瞬で、悠哉との間合いを詰めて、懐から斬りかかる松永だが…

『自分から近付いて来るか…なら…30連釘パンチ!!』

『がっ!?』

カウンターで、悠哉の釘パンチが松永の腹部にヒットする

『相手を嘗めすぎだ…』

松永が遥か後方に吹き飛ばされた…

『あれ…？終わった…のかよ!?』

『まだだ!!』

松永が瓦礫の山から戻ってくる…

『だよな…だが、相当喰らっただろう…諦めろよ…』

『ククク…何故…この城下町に人が全く居ないのか…分かるか？』

『知らん…大体が呪術の生け贄になった…って所か…？』

大笑いする松永

『そうだ!!私は町の人間の命を喰らった!!つまり、それだけの生命力を手に入れたのだよ!!貴様が何度私を殺そうと…無意味なのだ!!』

『胸糞悪い話は終わりか…？とりあえず、消えろよ…１００連…ツイン釘パンチ…』

松永が話終わる前に、釘パンチを松永に喰らわせる悠哉

『ごあああああぁぁぁぁぁぁぁ!?』

『これで少なくとも１００回は死んだな…じゃあ…次だ…５０連…釘パンチ…』

吹き飛ばされた松永に追い付き、更に追撃を与える…

『あ…が…』

『フライングフォーク…』

『が…!?』

フォークで、松永を岩に固定する

『さて…後何回殺せば良い？』

『貴様…』

『まだまだ、かかりそうだな…１００連…ツイン釘パンチ!!』

岩が砕け、山に松永が激突する…

『腕が持つかな…？１００連ツインネイルガン!!』

山が砕けて、一帯の地形が変わってしまった…

『やべ…やり過ぎた…ノブナガに謝らねえと…』

土砂に埋もれた松永を引きずり出す悠哉

『……』

『流石に死んだか…？』

『が…はぁ…』

『いきてんのかよ!?ゴキブリか!!』

松永の頭を掴み、ヨシテル達の元に移動する悠哉

『貴…様…許さ…ん…』

『原形留めてるのが不思議だな…呪術すげえな…』

悠哉がヨシテル達の元に到着する…

『おい…起きろ!!』

全員を叩き起こす悠哉

『痛い!?……遊佐殿!?』

『……寝てたのか…？お前…』

『違いますよ!?気を失って…松永は!?』

ボロボロになった松永をヨシテルに放り投げる

『うわあ!?汚いです!!』

『お前も大概酷いな!!』

『ヨシテル…貴様…許さん…』

やはり…回復力はかなり落ちているが…まだ生きてる…マジで町の人間の命を全て喰らったのかよ…

『さて…お前の目的は何だ…？』

『話すと…思うか…？』

『ヨシテル…首を落とせば流石に死ぬよな…？』

戸惑うヨシテル

『分かりません…町を破壊した瞬間から…松永は私達の理解の外の生物になってしまったので…』

『どうするか…』

瓦礫からノブナガが出てくる…

『目的なんぞどうでもよい…町を破壊したんじゃ…殺す…!!』

『ククク…時間切れだ…』

松永の身体を魔法陣が包み込む…

『転送する気か!?させるかよ!!』

悠哉が松永の腕を掴むが…すり抜けて、松永が消えてしまう…

『……逃げられましたね…』

『あの男…許さん!!ワシが叩きのめす!!』

呪術…厄介だな…どう攻略するか…後は…

『何時まで寝てんだ!!起きろ!!マサムネ!!眼鏡忍者!!』

『ぐあ!?』

『ぐふぁ!?』

倒れていた二人が起きる…

『ここは!?悠哉!?松永はどうした!!』

『ヨシテル様!!お怪我はありませんか!?』

ため息を吐く悠哉

『松永は逃げた…』

『そうか…松永が町を破壊した時に…私は一瞬で、やられてしまった…悠哉に鍛えて貰っているのに…不甲斐ない!!』

拳を地面に叩きつけるマサムネ

『鍛えていると言っても、まだ座禅しかしてないだろう…?』

『……それもそうだな…』

ヨシテルがノブナガに話しかける

『貴女が織田ノブナガですね…？』

『そうじゃ…お主は、足利ヨシテルか…天下の将軍様が何用じゃ…』

『松永軍を倒す為に…貴女の力を貸してください!!』

考え込むノブナガ…

『……確かにワシも奴は気に入らん…良いじゃろう…力を貸してやろう!!』

『有り難うございます!!』

『にしてもだ…松永は何故尾張に居たんだ…？』

マサムネが思い出したと言わんばかりに言う

『時間が無い…と言っていたが…？』

『時間が無い？俺と戦ったり、お前らと戦ったり…結構時間はありそうだったが…』

『考えても仕方なかろう…清洲城に戻るかのう…お主らも来い!!飯くらいならば出してやるぞ!!』

飯…だと!?

『よし行こう』

『相変わらず食事には凄い食い付きだな!!』

当たり前だ…食事は生きるのに必須だからな!!

『では…宜しくお願いします!!』

『決まりじゃな!!サル!!何時まで寝ておる!!行くぞ!!』

瓦礫の中からヒデヨシが出てくる

『おはようございます～お館様～!!』

マジで寝てたのか!?

『城に戻るぞ!!付いて参れ!!』

『は～い!!お館様!!』

一同は清洲城に向かった…

城下町は、壊滅的だが…城は無事か…松永は城に目的があったのか…?

一同…移動中…

清洲城客室の間

『さて…しかし松永か…厄介な奴が現れたのう…』

『申し訳ありません…私が至らないばかりに…』

ヨシテルが頭を下げる…それを見て悠哉がため息を吐く

『だから…将軍が簡単に頭を下げるなよ…』

『ヨシテル様…』

ノブナガが笑う

『噂以上に腰が低いのう…まあ、民に対しても誠実との話じゃからのう…』

そうだろうな…俺の知っている歴史とはかなり違うからな…全員女の時点で、知識は捨てたがな…

『噂といえば、ノブナガって南蛮好きで、有名だよな…?』

目を輝かせるノブナガ

『見るか!!ワシの南蛮渡来の品々を!!』

やべ…何か地雷を踏んだっぽい…

『サル!!例の鳥人間の干物を持ってこい!!』

鳥人間の干物!?まさか…

『お、お館様!!それが…』

『何じゃ…どうかしたのか…?』

『鳥人間の干物が…盗まれてます!!』

ッ!?松永の目的はそれか!?いや、まだ盗まれたと決まった訳じゃねえ…乾眠から目覚めた可能性もある…それに、ニトロと決まった訳でも無いしな…どのみち面倒な事にはなりそうだが…

『悠哉?どうしたのだ?顔色が優れないが…?』

『いや…ノブナガ…その鳥人間の干物って…何体あった?』

首を傾げるノブナガ

『一体じゃが…元々は三体じゃったが、一体は、運搬中に崖から落としてまって、消失…そして、もう一体は大友に贈ったが…?』

大友…大友宗麟か!!キリシタン大名だったか…確かにそう言うのは、好きそうだが…三体…一体は、行方不明…一体は、運搬中に消失…これも行方不明か…残りの一体は…

『申し上げます!!大友ソウリン様がノブナガ様に話があると、謁見にいらしていますが…如何致しましょう?』

詰んだな…

『ワシも話がある…すぐに通せ!!』

『ハッ!!』

さて…これは不味いな…俺の予想が正しければ…

客室の間に一人の少女が入ってくる…

『いきなりの訪問申し訳ありません…ノブナガさん…私がノブナガさんから頂いた鳥人間の干物が…盗まれました…』

やはりか…だとしたら何故、松永がニトロの存在を知っているのか…

『悪いが…急いだ方がよさそうだ…』

『あ、あの…貴方は?私は大友ソウリンです…お名前をお訊きして宜しいですか?』

少女が悠哉に名前を訪ねる

『俺は遊佐　悠哉…話の途中で悪いが…その鳥人間の干物…恐らく松永軍に盗まれた可能性が高い…』

『何か知っているのか?悠哉』

確か、鉛筆とノートはまだあったな…

絵をノートに描き始める悠哉

『こんな感じの干物…じゃなかったか?』

そこには、干からびた、顔に嘴が付いたような生き物の絵が描いてあった…

『そうです!!このような干物でした!!ご存じなんですか!?』

知ってるさ…しかし本当に、どうなってるんだ?この世界は…

『こいつはニトロ…細かい説明は省くが…こいつは死んでない…この干からびた状態で眠っているだけだ…

全員が驚いた表情をする

『まてまて!!どう見ても死んでいるだろう!!』

『これは乾眠と言われる状態だ…この状態なら、何千年と生きられる…そして、目覚めるなら、水一滴でも蘇ると言われている…正真正銘の化け物だ…』

ヨシテルが考え込む

『遊佐殿…貴方でも勝てないのですか…?』

『さあな…目覚めたばかりなら、勝てるだろうが…時間が経って、力を取り戻した状態なら分からんな…力は未知数だろう…』

ノブナガが眉間にシワを寄せる…

『ならば、確かに急いだ方が良いじゃろう…どうする…遊佐…』

『とりあえず、松永を倒すしか無いだろうな…ニトロまで使うとなると…全員が今のままでは勝てないだろうな…』

鍛えるか…？俺が全員…無理だろう…流石に死ぬよな…

『とりあえず…ノブナガの協力は取り付けたし…京の都に戻るか…？』

移動中に考えるしか無い…

『そうですね…では、参りましょうか!!』

『ならばサル!!ワシらも行くぞ!!』

『はい!!お館様!!』

とりあえず、結構な大所帯になってきたな…足利に伊達に豊臣…明智に織田…歴史が崩壊し過ぎだろ…

『あ、あの…私も付いていって…良いですか…？』

『大友がか？』

『足手纏いにはなりませんから!!お願いします!!』

俺は別に構わんが…

『ヨシテル…どうする？』

『協力して下さるなら、願っても無いことです!!』

『だとよ…んじゃ、行くか!!』

『はい!!有り難うございます!!』

こうして新たに、織田ノブナガ、豊臣ヒデヨシ、大友ソウリンを仲間に加えて京の都に戻る一行…松永は何故ニトロを必要としたのか…そして何故ニトロがこの世界に居るのか…次回に続く…

十話～パートナーが欲しい

さて…今、俺は不可侵大陸に居るんだが…ん？何でいきなりグルメ界モドキに居るのかって？そりゃあな…尾張の近くに入り口がある訳だしな…入り口程度ならどうにか戦えるしな…何より…

『パートナーの存在は必須だろう…トリコはテリー…ココはキッス…サニーはクイン…それぞれが八王だからな…俺も八王とまではいかなくとも…猛獣はパートナーにしたいからな…』

それに、パートナーが居るだけで戦闘が楽になる、ニトロまで相手にするとなると…俺一人では勝てない可能性が高い…

考え事をしていると、悠哉はある物を見付ける…

『何だこれ…玉子…？だが…巣らしい物も無いしな…何でこんな所に…？』

うーん…とりあえず…持って帰るか…食えるかもしれないし…

『うっし!!持って帰るか!!』

玉子を拾った瞬間に…玉子が割れた…

『!?デリケートな玉子だったか!?特殊調理食材!?』

と…思っていたんだが…違ったな…

『何か…孵化した…竜？』

玉子から出てきたのは、小さな頭に乗るくらいの大きさの純白のワイバーンの様な生き物だった…

『何だこいつ…ミラ〇レアス亜種みたいだな…』

なんとミラ〇レアス亜種そっくりの幼竜が産まれたのだ!!……

違うよな…?

『とりあえず…持って帰るか…?食えないよな…?』

『ガウ!!』

幼竜が悠哉の頭の上に乗る…

『おいおい…上に乗るなよ…野生では、上に乗るって事は、上下関係を表す事だよな…なめてんのか…?』

しかし、悠哉の発言も虚しく…

『グウ…』

『寝てんのか!?マジか!?』

寝ていた…

『とりあえず…帰るか…』

悠哉は人間界に戻っていった…

悠哉達が泊まっている尾張の国境の宿では…

『遊佐殿が居ません!!ミツヒデ!!捜すのです!!』

『ハッ!!ヨシテル様!!』

案外大騒ぎしていた…

『何じゃ…遊佐は迷子かのう…?』

『案外おっちょこちょいなんですねぇ…』

ノブナガとヒデヨシはマイペースであった…

『悠哉さん!!何処ですか~!?』

『悠哉!!何処へ…まさか…不可侵大陸に…!?』

全員が捜している中…悠哉は…

『何やってんだ…お前ら…』

『悠哉さん!!』

『悠哉!!』

『遊佐殿!!』

『貴様…一体何処へ行っていた!?』

説明はめんどいな…

『簡潔に言えば、動物捕獲の散歩だが…?』

全員が（・―・?）の表情を浮かべる…

『何だよ…人の頭を見て…』

『可愛いです…悠哉さん…その子何て言うんですか!?』

その子…?ああ…忘れてたな…こいつすげえ軽いんだよな…

『名前はまだ無い…ミラ○レアスで良いんじゃないか…?』

『何故伏せ字が…?』

細かい事は気にするな…

『それにしても悠哉…何処でそんな生き物を拾った?』

『不可侵大陸に居た…てか、最初は玉子だったが…手に持ったら孵化した…』

『不可侵大陸に入ったのですか!?遊佐殿…よく無事でしたね…』

まあ、確かにグルメ界に入るのはかなりキツいから…当然か…

『んでさ…名前どうすんだ…？』

ヨシテルが手を挙げる

『ヨシテル…言ってみ…』

『琥珀丸…はどうでしょう…？』

ちょっと待て…

『お前の馬の名前は…？』

自信満々に答えるヨシテル

『琥珀號です!!』

『却下で…』

何だよ…地味にお揃いの名前か…？てか、このミラ〇レアスモドキも不満そうだが……知能はかなり高いな…

『ならば!!双竜はどうだ!?』

『双子じゃねえよ…』

不敵に笑うミツヒデ…

『嫌な予感しかしねえが…言ってみ…眼鏡忍者…』

『朱雀でどうだ!?』

こいつら…

『お前の技の名前は…？』

『朱雀剛爆砕だ！』

『却下で…』

何か眼鏡忍者が何故だ！とか言っているがスルーだ…

『ならばワシが名付けてやろう…竜王でどうじゃ!?』

『それが一番駄目なんだよ!!』

『何故じゃ…』

ノブナガがｏｒｚしているが…こいつもスルーだ…

『私は…サル二号とか…』

『いや…もう無理しなくて良いぞ…無理にボケようとするな…』

後は…

『大友…何かあるか？』

『私は…その…そう言うのは…苦手で…』

『気にするな…思いきって言ってみろ!!』

『……ホープちゃん…』

ホープ…？希望…？

『ホープ…？何じゃそれは？』

『英語…つまり、南蛮とかで使っている言葉で、希望って意味だよ…』

『希望？随分と大層な名前だな…やはり朱雀でどうだ!?』

こいつは…

『ガウ!!』

幼竜がミツヒデに噛みつく…

『痛い!?』

『朱雀は絶対に嫌みたいだな…』

『じゃろうな…』

幼竜がソウリンの頭の上に乗る

『キュウ…』

どうやら決まったな…

『名前はホープに決定な!!』

『ええッ!?良いんですか!?私なんかが考えた名前で…』

『ガウ!!』

『ほら…そいつも気に入ってるみたいだからな…名前を選んだのはそいつだ…なら、問題なんか無いだろ?』

ホープは尻尾を振っている…

『分かりました…』

『所で悠哉…お前はどんな名前を考えていたんだ?』

『グロリアスドラゴン…』

全員が無言になる…

『まるで意味が解らんぞ!!』

『どういう…事だ…?』

『なぁにそれぇ!!』

『意味不明…』

悠哉が叫ぶ

『てめえら全員決闘者か!?』

ともあれ、名前はホープに決まったな…しかし、ソウリンのパートナーになってないか…?まあ、良いか…

十一話～神は万能じゃない…未来からの影響

また白い空間に居るな…俺…

『また俺が原作を読むのか…？あんまり経ってなくないか…？』

女神が現れる

『こんばんは!!今回も原作を読んで貰うのだけど…その前に話しておかなくちゃいけない事があるの…』

話しておかなくちゃいけない事ね…だいたい予想は付くが…

『そう、貴方の想像通りよ…この世界はかなりズレが生じている状態よ…』

『で？その原因が俺か…？』

『違うわよ…正直言って…私の力不足ね…』

神が力不足…？大丈夫か…

『どういう意味だ？』

『貴方を転生させる時に、結構力を使いすぎていて…』

世界の人間全員を転生させたんだよな…そりゃあ力も使いすぎるよな…

『で？結局はどうなったんだ？』

『大部分がトリコの世界とくっついちゃったの…』

すげえ事実だが…

『どうやったらそうなるんだ…』

『とりあえず、この世界に転生させた時に、トリコの特典を付けたのは良かったのだけれど…マイナス因子の影響で世界まで付いてきちゃったの…』

……

『どうしたの？』

『今の話を聞くと、力が有り余っているように聞こえるんだが…？世界をくっつけるって余程のパワーだろう…』

『うーん…そうでも無いのよ…実際は、既に出来上がっている世界に、人間一人を引っ越しさせるだけな訳だし、世界をくっつけるのも、ボンドとかで接着するような物なの…』

そんな世界で大丈夫か…？

『大丈夫じゃないわ…問題よ…』

デスヨネー…どうすっかな…

『今回ばかりは収拾がつかないのよね…』

『くっつけるのは簡単なのに、剥がすのは難しいのか…？』

苦笑いする女神

『紙と紙をボンドとかでくっつけた時に、無理やり剥がすとどうなるか…分かるわよね…？』

溜め息を吐く悠哉

『成る程…互いの世界が傷付く…下手をすれば、崩壊するわけか…』

『ええ…マイナス因子に気付けなかった私の力不足…ごめんなさい!!』

頭を下げる女神

『何でこう…俺の周りに居る偉いやつは腰が低いのか…ヨシテルと言い…あんたと言い…気負いすぎだ馬鹿が…』

『貴方は…口は悪いけど優しいわよね…女の子は放っておかないわよ？』

『残念ながら、俺はモテないんでね…』

女神が（ °д° ）な顔をする

『どの口が言うのかしら…』

何かうぜえが…まあ、良いか…それよりも…

『さっきから気になってるんだが…マイナス因子って何の事だ…？やっぱり呪術士の事か…？』

『ええ…呪術士の影響よ…しかも、その世界と…その世界の未来に居る呪術士の影響よ…』

また訳の分からない事になってるんだが…？

『貴方の転生した世界の未来でも、呪術士が暴れているのよ…』

『随分とめんどい奴だな…そいつの名前は…？』

『カシン居士…卑弥呼の闇の力を受け継いだ最悪の呪術士…』

変わった名前だな…カシン居士ね…

『正直…今の貴方では、勝てない可能性が高いわよ…』

『だろうな…ニトロが敵の手中にあるからには簡単には行かんだろうな…』

頷く女神

『だから、原作を読んで、修行してパワーアップして貰います!!』

例の如くトリコのコミックスが現れる…

『三冊増えてる!?時間軸までずれてるのか!?』

『ごめんなさい…』

仕方無いな…とりあえず読むか…

『相変わらず凄い集中力ね…』

……

『認めないぞ…』

『どうしたの!?』

これは…認めないぞ…

『一龍会長が…死んだなんて…絶対に認めないぞ!!』

『……私も読んでみたけど、私もそこは意外だったわよ…』

それに…

『何だよ!?三虎の技がベロって何だよ!?重力とかじゃないのかよ!?一気に好感度下がったぞ!!』

しかもメテオスパイス…ベロ関係無いじゃん…基本技をこう言う感じにしろよ…ベロって…

『と、とりあえず、人間界編は終わりよ…大丈夫かしら…?』

『バトルウルフの捕獲レベルがあり得ないのは分かった…で?轟魔って何処を食べるんだ…?ただの巨大なオッサンじゃねえか…』

『何か自棄になってない?』

仕方無いな…あり得ないもの…捕獲レベル６０００超えって何だよ…アシュラサウルスって次郎のフルコースメニューだったよな…

４０００超えって…勝てねえよ…

『と、とりあえず…今日は止めましょうか…』

『ああ…とりあえず起きたら修行して、アルティメットルーティーンを覚えるぜ…キツいだろうが…』

『分かったわ…じゃあね…』

手を振る女神…そして悠哉は直ぐに目が覚めた…

『さて…修行を始めるか…』

次回に続く…

十二話～本当ですか…？

『さてと…アルティメットルーティーンの修行をしなくちゃならないんだが…中々良い場所が無いな、確か向こうに水辺があったな、仕方無い…そこにするか、こんな朝方じゃあ誰も居ないだろうし、迷惑はかけないだろう』

俺はその発言を後悔する…慢心はダメ!!絶対!!

『おっし、着いたな…まずはイメージを固めるか…一瞬で風邪を引いて、一瞬で風邪を治すか…絶対に難しいな、しかも消費カロリーが半端じゃないときた…練習の環境作りでも苦労するな…』

俺はそのまま目を瞑り、イメージをした…風邪を引いている自分を…

『くっ…クラクラしてきた…よし、第一段階終了…後は治すか…ふう、集中しろ……』

これは無理じゃね…？めっちゃクラクラするし、集中出来ないんだが…やべえ…汗が半端じゃない…

『……誰か居るんですか…？』

誰か居るのか…？視界がぼやけて来たぞ…この声は…

『ソウリンか…？』

『ゆ、悠哉さん!?何でここに!?って…大丈夫ですか!?』

『大丈夫だ…問題無い…』

『明らかに大丈夫じゃないですよ!?』

あー…良く見えないが…

『ソウリン…水浴びしてたか…?』

『ふぇ?……いやぁ!!』

『グハァ…』

俺は意識が暗転した…

悠哉さんを思いっきり殴ってしまった…明らかに体調が悪そうなのに…

『それよりも…何で悠哉さんがこんな体調が悪いのに水辺に居たんだろう…?』

『う…』

うなされてますね…汗も酷い、身体を拭かないと風邪が悪くなってしまいます!!

『悠哉さん!!少し待っていて下さい！』

ソウリンが水辺に水を汲みに行った…その間に悠哉に近付く影があった…

『フン…松永を退けた男が…こいつか、刃頭雨流を倒した奴等の中に居たな、こいつは戦っては居なかったが、あの中では一番の実力者だろう…』

更に悠哉に二つの影が近付く…

『我が主…如何致しますか…？』

『カシン様…消しておきましょうか？』

『いや…こいつには術式を掛けておく、ニトロと近い実力の持ち主…時間をかけて、ゆっくりと我の物にしてくれる!!』

影が悠哉に術式を施す…

『カシン様…男なんて必要ありませんよ、松永も所詮捨て駒…いくら強いからと言って…』

『そう言うな鬼灯よ…こいつの力は利用価値がある…』

『ハッ…申し訳ありません…カシン様、出すぎた発言でした…』

『気にするな…行くぞ…』

悠哉に近付いた影が消える…それと入れ違いでソウリンが戻って

くる…

『悠哉さん!!お待たせしました!!身体を早速拭きますよ!!』

『ん……ソウリンか？俺は…？確か水辺で……何故、拳を振り上げる…？』

『覚えて無いんですね!?』

『お、おう…しかし…

意識が朦朧とする…しかし何故俺は…

『何故俺は上半身裸なんだ…？服は脱いでない筈だが…』

『そ、それはですね…身体を拭かないと風邪が悪くなってしまいますので…』

風邪…アルティメットルーティーンの修行は難しいな…風邪をイメージするのは止めた方が良かったな…何かソウリンにも迷惑をかけたみたいだしな…

『その布貸してくれ…自分で拭く…』

『無理はしないで下さいね…？』

『ありがとな…ソウリン』

『……どういたしまして!!』

大分楽になってきたな…

『あの…どうして悠哉さんはあんな所に居たんですか…？こんな朝方に…』

『修行だよ…』

『修行ですか？悠哉さんは物凄く強いって聞きましたけど…』

『敵は…ニトロはもっと強い可能性がある…』

正直、ニトロの強さは計り知れない、ブルーニトロとか言うのは正に化け物らしいしな…

『どんな修行をしていたんですか？』

『……アルティメットルーティーンって奴の修行だよ…』

『アルティメットルーティーン？』

『所謂思い込みを現実に反映させる技だ…』

今更ながらとんでもない技だよな…

『信じる心ですかね…？』

『まあ、そうだな…お前はキリスト教信者だったな…信仰心、案外向いてるんじゃないか？』

まあ、何事も信じなければ始まらないからな…

『今度機会があれば教えて下さい！』

『ああ…今日の礼もあるしな…』

『今日のお礼…と言うよりかは、責任を取ってほしいですがね…』

ソウリンが何か言ったが良く聞こえなかったな…トリコの嗅覚も良いが、ゼブラの聴力も欲しいよな…

『とりあえず、宿に戻ろうぜ…少し休みたいしな…』

『そうですね、安静にしないと駄目ですよ!!良いですね？』

『分かってるよ…』

母親かこいつは…

『ホープちゃん!!行きますよ!!』

『ガウ!!』

『居ないと思ったら…水の中に居たのか…潜水も出来るとは…すごいな…』

捕獲レベルは幾つくらいなんだろうな…

ソウリンと宿に戻る悠哉…本人は気付いていない…自分が呪術に掛かっている事を…

十三話～任せろ!!

俺は今、「危険区域」に居る…不可侵大陸とは違い、結界が張られておらず、普通の人間でも入れる場所だ。
しかし、猛獣も居る場所でもある、と言っても捕獲レベルは５～１０前後の猛獣ばかりだ…ヨシテルや、マサムネクラスなら簡単に進める場所だ…まあ、一般人は近寄りもしない場所だがな…

『しかし、本当に居るのかよ…「デビル大蛇」が…』

『その「デビル大蛇」とやらかは解らんが、巨大な三ツ目の大蛇を見たと言う噂は聞いた事があるからのう…』

三ツ目の大蛇…とにかく、噂程度だが見てみるのも良いかも知れないと…ここに来たんだが…

『雑魚ばっかりだな…美味い猛獣も殆んど居ないしな…』

『しかし、あやつ等を別行動にしても良かったのか?』

ノブナガが俺に訊ねる…まあ、あいつ等にはニトロの情報収集を頼まなければならないからな…

『仕方無いだろうが…ニトロを紛失したのはこの辺りなんだろう…?』

『そうじゃ、あの崖の上から落としてしまったらしいからのう』

ノブナガが俺達の正面にある崖の上を指差す…

『どちらにせよ、戦いになったら俺に任せろ…お前じゃ勝てない可能性が高いからな』

『ほう…ワシが簡単に負けるとでも…？』

ノブナガが俺に大剣を向ける

『松永に勝てなかった奴が良く言うな…ったく…この猛獣の少なさ…恐らくニトロは復活してるだろうな』

『そのニトロとやらは一体何なのじゃ？』

『ニトロってのは、恐ろしく知能が高い奴でな…文明を持つ位にな…しかも強い、そして何より…気性が荒く、生命力が高い』

実際、頭を吹き飛ばされても生きて、暴れ続けるらしいが…

『お主がそこまで言う程か…』

『まあ、出来るだけさっさと片付けたい相手だな…』

やっぱり嗅覚が欲しいな…何かを探す時は楽だろうしな…

『……何か来るな…ノブナガ、構えておけ…』

『フン…ワシに命令するな!!』

そう言って、大剣を構えるノブナガ…構えるんだな…

『さてと…何が来るか…今までの猛獣よりは強い気配だが…』

そんな事を考えていると、木を薙ぎ倒しながらデビル大蛇が出てくる…

『おかしいだろ…』

『確かに…とんでもない化け物じゃな…おかしいくらいじゃな…』

違う…こいつは…

『何でこんな昼間から洞窟の外に居るんだよ!?それにこいつ…逃げてんのか!?』

違和感を感じ取った瞬間…デビル大蛇の首が吹き飛んだ…

『なんじゃ!?一体何なのじゃ!?遊佐!!お主何かしたか!?

『いや…どうやら大当たりを引いたみたいだな…』

デビル大蛇の首が飛んでいった方に目をやると、「そいつ」は一瞬でデビル大蛇の頭を平らげた…毒に高い免疫力がある証拠だ…

『あれが…ニトロだ…ノブナガ、下がっていろ…』

『フン!!あの程度の奴…このワシが…』

『下がれ…二度も言わせるな…』

『……分かった』

ノブナガは後ろに下がった…安心は出来ないが…まだマシだろう…

ニトロが俺を睨む…新しい獲物を見付けたと言わんばかりに、不気味な笑みを浮かべて。

『さて、今の俺で勝てるかな…？』

アルティメットルーティーンも習得していないし、ゼブラの様な協力者も居ないしな…ノブナガは戦力にはならんし…

『とりあえず、一気に終わらせないと不利だな…』

『グガガガァ!!』

マジかよ!! 一瞬で距離を…!! チッ…

『フォークシールド!!』

俺の腹部を手刀で突き刺そうとするニトロの攻撃をフォークシールドで防ぐ…間一髪だ…

『５０連釘パンチ!!』

『ガッ…』

俺はフォークシールドの衝撃で体勢が崩れたニトロに釘パンチを撃ち込む…しかし…

『後ろに瞬時に後退してダメージを減らしたか…やっぱりトリコの技って速度に欠けるんだよな…』

『ギギ…』

しかし釘パンチを初っぱなから見せたのは失敗だったか…今ので恐らく…

『グギャア!!』

『３０連フォークシールド!!』

ニトロのパンチを３０連フォークシールドで正面から防ぐ…フォークシールドが何枚も連続して壊れてゆく…正にそれは…

『相変わらず凄まじい学習能力だな!!見ただけで５０連の半分の２５連まで釘パンチを放つとは!!』

そして今ので…フォークシールドも覚えられたな…まるで三虎だな…いや、三虎は完全に技を真似るんだったか…？いや、今はどうでも良いか!!

『レッグナイフ!!』

ほぼゼロ距離でニトロにレッグナイフを放つが、紙一重でかわされ、腹部に釘パンチを喰らってしまう…

『ゴハッ…!!うわ～…超いてえ…』

『ガガガ…』

コノヤロウ…笑ってやがるな…しかしこいつは捕獲レベルは幾つくらいだ？明らかにグルメピラミッドのニトロよりは強いだろう…甘く見積もって１５０～２００くらいと見るのが妥当か…

『なら…これだけの量のフォーク…避けられるか…?』

俺は１０００近くのフォークを作り出し、ニトロに向かって一斉に放った…

『ググガ…』

ニトロはフォークシールドを使うが、圧倒的な数の前にシールドは破壊される…

『グギャ!!グギャ!!』

シールドは破壊されたが驚異的な運動能力で殆んどのフォークを避けるが…

『ガギ!?』

『これで動きは封じたな…』

残ったフォークがニトロの足に突き刺さり、ニトロの動きを封じた…そして、ニトロに先ほど放ったレッグナイフが後ろから飛んできた…

『ガア…ッ』

『レッグブーメラン…やっぱり実戦では動きを止めて喰らわすか、陽動程度にしか使えんな…』

レッグブーメランがニトロに直撃するが、ニトロはまだ動けていた…

『流石の生命力だな…』

『グギャ!!グギャギャア!!』

俺に向かって最期の抵抗と言わんばかりに、釘パンチを放つニトロ。

『なら俺は全力でお前を倒そう…お前達は知能が高い…お前らの戦いはある意味誇りある物だ…俺もお前達に敬意を表し…今、出来る最高の技を…』

『ガ…?』

ニトロにはイメージが伝わって居た…これから自分がどうなるのかが…

『１００連…ツインネイルガン!!』

俺はこいつを倒すイメージを持って…ネイルガンを放った…

『少しだけだが…出来たかな…アルティメットルーティーン?』

ニトロの身体がネイルガンによって跡形も無く消し飛んだ…

『ふぅ…疲れた…デビル大蛇の肉がまだ少し残っているな…持って帰って食うか…ノブナガ、行くぞ…』

『とんでもない奴じゃな…ワシの天下取りは楽な物ではないのう…』

全く…何をいってんだか…

『さっさと戻るぞ!!腹が減ったからな…』

それにしても、さっきのニトロ…ここの栄養価の低い猛獣で、あれだけの強さか…もっと栄養価の高い食べ物を食べて強くなっているとしたら…寒気がするな…

『まあ、やれるだけやるか…それよりも早く帰ってデビル大蛇の肉を食うか!!』

十四話～修行の成果!!

（さてさて…松永やら、ニトロやらでうやむやになっていたあの二人の修行を見てやらないとな…）

ニトロ討伐にかなりの時間を要した為、レベルアップは急務であった。

「てな訳でだ…とりあえず、ヨシテル!!錘を外して良いぞ」

「どう言う訳か分かりませんが、貴方がそう言うなら外しましょう…ようやく修行の第一段階が終了…で、良いのですか…？」

（言えない…実はかなり前から終了しても大丈夫だったなんて、言えない…）

自分の過失をスルーする、悠哉であった…

「まあな…で？外した感覚はどうだ？」

「ありきたりですけど、身体が軽いですね!!」

（身体が軽いか…実際は結構筋肉が増えて体重は上がってるんだよな…まあ、言わん方が良いだろうけどな）

体重は女性に対しての、最大の禁句である事を悠哉は知っていた…

「悠哉…私の座禅はもう良いのか？」

（マサムネも十分だろうな…それにしても…）

悠哉はマサムネの発言に疑問を感じていた、それは…

「お前、自分の事を『私』って言ったか？この前まで『我』じゃなかったか？」

（記憶違いじゃ無ければな…）

「ああ、ある程度、私の好感度が上がると変わるんだ」

某ゲームシステムの様な発言に対して悠哉は…

「それは、なんてギャルゲだよ…」

ある意味当然の反応をした。

（全員首を傾げて『ギャルゲ？』と言っている…実際お前らギャルゲにいそうだぞ？）

「まあ、関係無い話は置いとくが、お前ら二人の修行の成果を見せて貰うぞ…」

「いきなりですね…で？どうするんですか？」

「それはな…」

――――――――――――――――――――――――――――――

（マサムネとヨシテルが冷や汗をかいて立っている…そんなに酷いか？『俺と闘って、俺に傷を付けろ』って…）

実際、悠哉に傷を付けるのは、子犬がライオンに傷を付けろ、と言っている様な物である、それを知っている二人は…

「大体!!座禅だけで悠哉に傷を付けれる程強くなれる訳が無い!!こんなのは無理だ!!」

「私もそう思います…確かに腕力は付いたかも知れませんが、貴方に傷を付けれる程では…」

絶賛拒否キャンペーン実施中である…

(ふむ…まあ、その疑問も尤もだな…こう言う場合は、やってみなきゃ分からんのだがな、修行の成果は)

「そう言わずにやれよ、子供じゃ無いんだからよ…」

「無理だ!!」「無理です!!」

(そんなに俺と闘うのが嫌か…?仕方無い…やる気を出すには…何か褒美でもやるのが得策か?)

飴と鞭は、本来はかなり有効な物であったが、今回は有効過ぎた…

「仕方ねぇ…俺に傷を付けたら、何かしら褒美をやろう…俺が出来る事なら『なんでも』してやるぞ?」

(そう言った瞬間、ヨシテルとマサムネの眼に…光が宿った…あれ?何か地雷踏んだか?)

「ふふふ…悠哉に…『なんでも』ふふふ…ふふふ…」

（マサムネ怖えぇ!?何だ!?身体中から、嫌な汗が出てくる!?）

「遊佐殿…今、『なんでも』って言いましたよね…？絶対ですよ…？」

（だから何でそんなに怖いんだよ!?）

謎の気迫に、恐怖を覚えた悠哉であった…

「物凄いやる気じゃのう…」

「怖いですね～」

「……なんでも…ゴクリ…」

ノブナガとヒデヨシは全くの他人事…ソウリンは妄想の世界へ…

そして、ミツヒデは…

「ヨシテル様…一体何をさせるおつもりなのか…」

ヨシテルの行動に不安を覚えていた…

「良し!!始めるぞ！」

悠哉の合図に反応して、構えるヨシテルとマサムネ…

「さて…どっちから仕掛けて来るか…」

先に仕掛けたのは、マサムネだった…

「伊達マサムネ…参る!!」

マサムネが正面から一直線に突っ込んで来る、以前の攻撃よりも遥かに速い一撃だった。

（何故だ!?ただ座禅をしていただけなのに…動きやすい!!）

しかし、速くなった攻撃も悠哉に回避されてしまう。

「動きやすいって思ったか？」

「心が読めるのか…？」

思っていた事を言われ、マサムネに動揺による隙が生まれた。

「隙アリってな!!」

マサムネの脇腹に打撃を入れる悠哉、マサムネは5メートル程後方に吹き飛ばされた。

「誰が修行をしてると思ってんだ？修行の効果くらいなら読める…」

「隙があるのは貴方の方です!! ハアッ!!」

（マサムネに気を取られている隙を突いて来たか…戦術的にはアリだろうけどな…）

「隙を狙うなら、確実な隙を狙え!!その程度なら反応されるぞ!!」

ヨシテルの剣を難なく避けると、マサムネと同じく、脇腹に打撃を与えた。

「はい2コンボ…お前ら、特にヨシテル!!自分の利点を生かせよ!!そんなんじゃ、鬼丸国綱は扱えないぞ!!」

(まあ、竜王の牙を使った刀を使いこなせって方が難しいが、ヨシテルには素質がある…何より…)

「お前の意志はそんな物か!?民を救うんだろ!!刀1つ使いこなせないで何が人を救うだ!!」

(少し厳しいが仕方無い…生半可じゃ不可能だからな)

「私の想いは…私の意志は…こんな事で、挫けたりしません!!」

「ヨシテル殿…私も…負けてはおれぬ!!ヨシテル殿!!参るぞ!」

マサムネとヨシテルが悠哉に向かって得物を向ける…

「来いよ!!この一撃を受けきれるならな!!」

悠哉は足に力を集中させた…鋭い刃物のような殺気を放っている…

「レッグ…ナイフ!!」

悠哉のレッグナイフがヨシテルとマサムネに向かって飛んでいく。

「雷光一閃…」「双竜…」

二人は自分の出せる最大の技を『合わせて』出した。

「雲切り!!」「連斬!!」

二人の攻撃が合わさり、レッグナイフと激突した。

「すげえ威力だな…レッグナイフよりも…強い!!」

その言葉通り、レッグナイフを破壊し、二人の合体技は悠哉に向かって行った。

(……まあ、合格か？フォークアーマーを使えば無傷で済むが、やめとくか…)

悠哉はその攻撃を正面から受けた、そして悠哉の頬に3つの連なる傷を付けた…

「やりましたか!?」「やったか!?」

「……折角、合格なのにフラグ立てるなよ、台無しだよ!!」

全員フラグの意味が分かって居なかったが、二人の攻撃はかなりの威力だったにも関わらず、平然としている悠哉に驚きを隠せなかった…

「全員何ポカーンとしてるんだ…？合格だぞ？喜べよ!!」

(合格…ですか…ここまで力の差があるのに合格と言われても、嬉しくはありませんね…もっと強くならねば!!)

(くっ…私一人では…傷1つ付けられないとは…まだまだ修行をしなくては…)

二人は力の差を見せ付けられながらも、心の中で一層の奮起を誓っ

ていた。

「さて、お前たちの言うことをなんでも聞いてやる…言ってみろ…」

（正直怖いが…仕方ねえ…約束だしな!!）

悠哉、現在、恐怖の、どん底。

「では…まずは私から…悠哉!!」

マサムネの叫びにビビる悠哉!!

「お、おう!!」

「私の修行をこれからも宜しく頼む!!以上だ!!」

「……ひょ？」

予想外のマサムネの発言に、間抜けな声を出す悠哉…

「えっと…それだけか…？」

悠哉の質問に頷くマサムネ。

「ああ…私がもっと強くなって…悠哉と肩を並べる程になってから、本当の願いを伝えよう…」

「お、おう…分かった…」

（よう分からんな…）

「それでは…次は私ですね…」

悠哉の恐怖の時間はまだ終わっていない…

（さあ…何が来る…？）

悠哉は生唾を飲み込んで身構えた…しかし、ヨシテルからのお願いは、意外な物だった…そして、そのお願いに一番反応したのは…ミツヒデだった…

「私の弟と…会って欲しいのです…!!」

ヨシテルの弟に会って欲しいとは!?次回に続く!!

十五話～足利義昭!!そして…

ヨシテルの願いに、ミツヒデが反対した…

「なりませぬ!!ヨシテル様!!この様な男を義昭様に会わせようなどと…!!」

(この様な男って…眼鏡忍者の奴…酷くね…?)

地味にミツヒデの発言にダメージを受ける悠哉であった…

そして、ミツヒデの反対を無視して、ヨシテルは、話を進めていく。

「遊佐殿…義昭に会って欲しい理由は二つあります…まず一つは、義昭を安全な場所に移って貰うために、遊佐殿にも手伝って頂きたい…そして、もう一つは…義昭に付ける護衛を見定めて欲しいのですが…」

「前者の理由は理解出来るが、護衛くらいは自分で決められんのか?」

ヨシテルは悔しそうに理由を話した…

「正直、私の部下にも松永の息がかかった人間が居る可能性が高いのです…」

(成る程な…天下を獲るならなら何重にも策を弄する…敵の大将の喉元に届く刃を仕込んでおく、合理的だな)

「ヨシテル様…理由は分かりますが、やはり会わせるべきでは…」

ミツヒデはあくまで反対を貫くつもりの様だった…

「そんなにも気に食わないか？眼鏡忍者」

「ああ!!気に食わんな!!ヨシテル様への態度もだが…ヨシテル様が貴様の様な男を…」

ミツヒデが何かを言いかけた、その時…ミツヒデの喉元に鬼丸国綱が突き付けられた…

「ミツヒデ…余計な事は…言わない方が…良いですよ…？」

「は、はい…申し訳ありませんでした…」

ミツヒデは恐怖に怯えていた…

（速いな今のは、マッチさんの居合いと張れるんじゃないか…？）

「とりあえず、早速お前の弟に会いに行くぞ」

悠哉の決断の早さに全員が驚いた。

「遊佐…お主、今から行くつもりか…？ヨシテル殿の頼みとは言え、急ぎすぎではないかのう？」

悠哉は満面の笑みでノブナガに答えた…

「思い立ったが吉日、その日以外は全て凶日ってな!!」

そう…トリコの名台詞である…その台詞を聞いたミツヒデは悠哉に苦言を呈した…

「何だそれは…計画性も何も無い!!馬鹿丸出しではないか!!」

「おい、眼鏡忍者…この台詞は俺の尊敬する人の台詞だ…馬鹿にするなよ…」

悠哉はミツヒデに少し強めの怒気を放った…

「まあまあ、ゆうやんも怒らないで…格好良いと思うよ?こう、『ガンガン行こうぜ!!』って感じで!!」

「おい、ヒデヨシ…ゆうやんって何だよ?」

悠哉の問いに笑顔で答えるヒデヨシ…

「フフン♪『悠哉』だから『ゆうやん』だよ!!あとは、ミッチーは、『ミツヒデ』だから『ミッチー』で、伊達っちは、『伊達』だから『伊達っち』!!ヨッシー将軍は、『ヨシテル』だから『ヨッシー将軍』!!それと、リンリンは『ソウリン』だから『リンリン』!!どう?」

全員が無言である…しかし、伊達っち…もとい、マサムネだけは、ヒデヨシに質問した…

「何故…私だけ、名字なのだ?」

「えー…伊達っちは、『マササマ』とか、『ムネムネ』とかが良いの?」

「伊達っちで頼む…」

即答であった…

「サル…ワシには何も無いのかのう…？」
「お館様はお館様ですよ!!」
「そうか…」
少し残念な気もするノブナガだった…
「あだ名は良いが、とりあえず行くぞ…」
「そうですね…義昭!!待っていて下さい！」
一行は京の都の数里前にある村に向かった…そこに義昭が身を潜めて居るらしい…
一方その頃、松永は…

「あの小娘達が義昭の元へ向かった…？成る程…新たに場所を移すか？まあ構わん、奴等も最早数日の命だ!!」
松永の笑い声が城内に響き渡る、その笑い声を聞いて、鼻で笑って居る三人が居た…
「あの男…刃頭雨流を渡したのにも関わらず、使いこなせなかった癖に馬鹿笑いして…」

「ふふ…そう言わないの紫苑、…松永は私達の目的の為の傀儡になって貰うんだから……カシン様？どうされました？」

「あの遊佐とか言う男…我の呪詛を受けて、殆ど影響を受けておらぬ…確かに遅効性の呪術ではあるが、あまりにも効果が薄い…」

カシンが呪術を掛けて、ここまで効果が無かったのは初めてである…

「主の呪術が効かない!?その様な人間が居るのですか!?」

鬼灯と紫苑も驚きを隠せなかった…カシンの呪術は、死者をも操る程であった為である。

「奴の中には…何かが居る…あの憎き卑弥呼をも越える…何かが…」

カシンは知らなかった…悠哉の中には、八王とも互角に闘える『鬼』が居る事を…

(あの鳥人間の様な生き物が言っていた『細胞』の力か…？そもそも、あの生き物は、何故あそこまでの知能と力がある？卑弥呼の時代にもあのような生き物は、居なかった…一体この世はどうなる？この世界を破壊する為に我は居ると言うのに…このままでは…)

「主…何をそんなに思い詰めて居るんですか…？」

考え込むカシンを見て、紫苑が心配をするように声をかけた…

「心配するな、全て上手くいく…この愚かな世界を破壊する!!」

「「御意!!」」

そして、その姿を上空から見下ろす影が一つ…

「カシン…どうして…」

義昭の元へ向かった一行…そして、カシンの手のひらの上で踊らされている松永…このまま松永は利用されたままで終わるのか…次回に続く!!